

長岡京左京二条四坊一町跡・

東土川遺跡

埋蔵文化財発掘調査報告書

2018

国際文化財株式会社



# 例 言

1. 本書は、京都市南区久世東土川町 366-1 における埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本調査は、株式会社 辻製作所の計画する工場新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査である。  
文化財保護法（昭和 25 年法律第 214 号）第 92 条の規定により文文財第 127 号  
（受付番号 16NG285）の通知にて実施したものである。
3. 調査の体制は、京都府教育庁指導部文化財保護課ならびに京都市文化市民局文化芸術都市推進室文  
化財保護課の指導のもとに国際文化財株式会社が実施した。
4. 発掘調査の面積は、450㎡である。
5. 発掘調査は、平成 30 年 4 月 11 日～平成 30 年 5 月 31 日まで実施した。  
整理作業は、平成 30 年 6 月 1 日～平成 30 年 7 月 31 日まで実施した。
6. 発掘調査及び本報告書作成にあたっては、下記の体制にて行った。  
国際文化財株式会社  
西日本支店長 森下 賢司  
主任調査員 河野 凡洋  
調査補助員 小林 郁也
7. 発掘調査及び整理作業は河野が担当した。
8. 遺構、遺物の写真撮影及び本書の執筆、編集は河野が行った。
9. 遺構図に使用した座標、水準測量は、テクノ・システム株式会社が行った。
10. 発掘調査及び整理作業、報告書作成にあたっては、下記の方々及び関係機関のご指導、ご協力を  
得ることができました。ご芳名を記して感謝の意を表します。（敬称略）  
家崎 孝治、馬瀬 智光、國下多美樹、島津 功、中塚 良、持田 透、山田 邦和、吉川 義彦（五十音順）  
京都府教育庁指導部文化財保護課、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課、  
公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所、株式会社辻製作所、株式会社アート、  
テクノ・システム株式会社、一般社団法人歴史文化研究所

# 凡 例

1. 遺構に使用した座標値は、世界測地系Ⅵ系に基づいており、方位は座標北を北として表記した。  
水準点はT.P.値（東京湾平均海面値）を使用し、本文中では「T.P.」と略称している。
2. 色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄、1994）を使用した。
3. 遺構図は各図にスケールを掲載し、原則として縮尺を40・100・200・400分の1とした。
4. 遺物実測図は各図にスケールを掲載し、原則として縮尺を4分の1とした。
5. 本書に収録した各資料の図は、本書の体裁に合わせて整えるためにそれぞれ縮小した。
6. 本書に収録した図資料等の引用、参考文献、索引は、各章末に註として掲載した。
7. 遺構の分類は、下記の呼称を踏襲した。  
掘立柱建物跡、礎石建物跡、柵列、溝、土坑、柱穴、礎石、園池、堀、流路。
8. 遺物は全てに通し番号を付加した。実測図・写真図版共に一致している。
9. 出土遺物の精細な事項については、古代の土器研究会編『古代の土器1 都城の土器集成』1992、古代の土器研究会編『古代の土器2 都城の土器集成Ⅱ』1993、古代の土器研究会編『古代の土器3 都城の土器集成Ⅲ』1994、小森俊寛『京から出土する土器の編年的研究 - 日本律令的土器様式の成立と展開、7～19世紀 -』京都編集工房2005にしたがった。

# 本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第2章 位置と歴史的環境	6
第3章 遺構	11
第1節 基本層序	11
第2節 遺構	11
1. 弥生時代の遺構	11
2-1. 古墳時代から奈良時代の遺構	17
2-2. 長岡京期の遺構	18
2-3. 鎌倉時代から江戸時代の遺構	18
第4章 遺物	25
第1節 遺物の概要	25
第2節 出土遺物	25
第5章 総括	28

# 挿図目次

図1 調査地位置図1 (1:500,000)	1
図2 調査地位置図2 (1:10,000)	2
図3 調査地位置図3 (1:2,500)	3
図4 調査区作業風景(東から)	4
図5 調査区作業風景(南から)	4
図6 計画範囲と試掘・調査区配置図(1:500)	5
図7 周辺調査地位置図(1:5,000)	9
図8 長岡京条坊復元図(1:40,000)	10
図9 東壁土層断面図(1:100)、北壁土層断面図(1:50)	12
図10 流路1、2、3、4土層断面図(1:40)	13
図11 1. 下層遺構平面図(1:200)	14
図12 2. 上層遺構全体平面図(1:200)	15
図13 2-1. 古墳時代から奈良時代の遺構平面図(1:200)	16
図14 流路13平面図(1:80) 断面図(1:40)	17
図15 2-2. 長岡京期の遺構平面図(1:200)	19
図16 柱穴列1平面図、断面図(1:40)	20
図17 溝8土層断面図(1:40)	21
図18 土坑26平面図、断面図(1:40)	21
図19 2-3. 鎌倉時代から江戸時代の遺構平面図(1:200)	22
図20 溝5北側遺物出土状況平面図(1:40)	24
図21 溝1、15土層断面図(1:40)	24
図22 出土遺物(土器、瓦1:4)(石製品1:2)	27
図23 調査区と試掘トレンチ1(1:250)	31

図 24	調査地遺構変遷図（1：400）	32
図 25	調査地と既往調査地の長岡京期主要遺構配置図（1：3,000）	33
図 26	条里型地割概念図（1：2,500）	34

## 表目次

表 1	周辺調査地の概要	8
表 2	出土遺物概要表	25
表 3	遺物観察表	35

## 図版目次

図版 1	遺構	1	調査前全景（南から）
		2	中、近世遺構全景（南から）
図版 2	遺構	1	溝 8 全景（南から）
		2	溝 8 全景（北から）
図版 3	遺構	1	調査区遺構全景（南から）
		2	調査区遺構全景（北から）
図版 4	遺構	1	柱穴列 1 検出状況（南から）
		2	柱穴列 1 完掘状況（南から）
図版 5	遺構	1	溝 5 遺物出土状況（南から）
		2	溝 13 遺物出土状況（西から）
図版 6	遺構	1	流路 1 全景（北西から）
		2	流路 2 全景（南から）
図版 7	遺構	1	流路 3、4 全景（南から）
		2	柱穴 46 土層断面（西から）
		3	柱穴 47 土層断面（西から）
		4	柱穴 48 土層断面（北から）
		5	柱穴 58 土層断面（西から）
図版 8	遺物		出土遺物（1）
図版 9	遺物		出土遺物（2）

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査に至る経緯

今回の発掘調査に至る経緯は、京都市南区久世東土川町 366-1（図2・3）にて株式会社辻製作所が計画した工場新築工事が予定されたことが発端となる。建物は、桂川パーキングエリア北側の旧耕作地に計画された。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である「長岡京跡・東土川遺跡」に該当する。

2018年0月00日株式会社辻製作所によって工場の新築が計画されたことから、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、「京都市文化財保護課」という）は当該地の試掘調査を2018年0月00日に実施した。試掘の結果、埋蔵文化財の検出が確認されたことから、株式会社辻製作所と京都市文化財保護課との間で調査の協議がもたれた。発掘調査は京都府教育庁指導部文化財保護課、京都市文化財保護課の指導を受け、株式会社辻製作所より委託を受けた国際文化財株式会社が行った。現地調査期間は平成30年4月11日～平成30年5月31日まで実施した。発掘調査の結果、弥生時代から奈良時代にかけての流路、柱穴、長岡京期の溝、柱穴、鎌倉時代から江戸時代までの耕作に伴った溝を検出した。

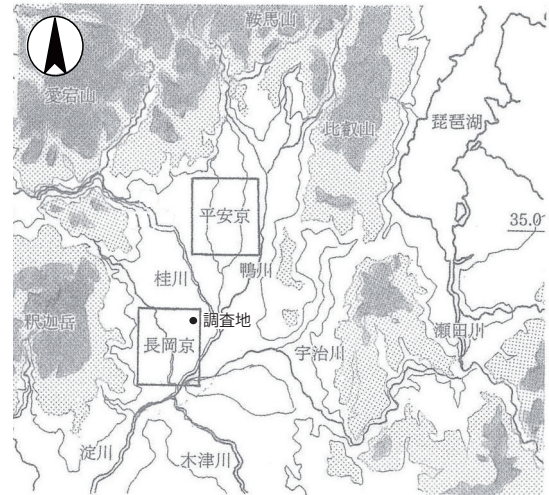


図1 調査地位置図1（1：500,000）

## 第2節 調査の経過

今回の調査の体制と方法を定めるために、周辺の調査によって得られた遺構・遺物の成果や今日までの研究について精査し、検証を行った。調査地南側の桂川パーキングエリア建設時に1993年から1997年にかけて財団法人京都府埋蔵文化財センター（現在は公益財団法人）によって発掘調査が実施されている<sup>(註1)</sup>。調査によって、長岡京条坊復元<sup>(註2)</sup>による東三坊大路の東西側溝や二条条間大路の南北側溝が確認されている。また、長岡京期の多数の建物跡や柵列などが確認されている。他にも弥生時代の方形周溝墓や流路などが検出された。2018年に京都市文化財保護課により調査地内の試掘調査が実施された。3カ所に設定されたトレンチから、東三坊大路の東側側溝と考えられる南北溝、調査地北側の1トレンチからは一条大路の南側側溝と考えられる東西溝が検出されており、1トレンチ内で両者は取り付いている。

それらの成果によって、当調査地内で確認された溝は東三坊大路の東側側溝に相当すると考えられ、調査地内での溝の規模や遺物の有無を確認することを主眼とし、その他長岡京跡や東土川遺跡に関連する遺構、遺物の確認を目的として調査を開始することとなった。

調査体制としては、主任調査員1名、調査補助員1名の配置を行った。また、京都市文化財保護課の指導により、学術研究に基づいた調査を行うため、調査検証委員会を設立し、同志社女子大学現代社会学部博士（文化史学）山田邦和教授に委員を依頼した。

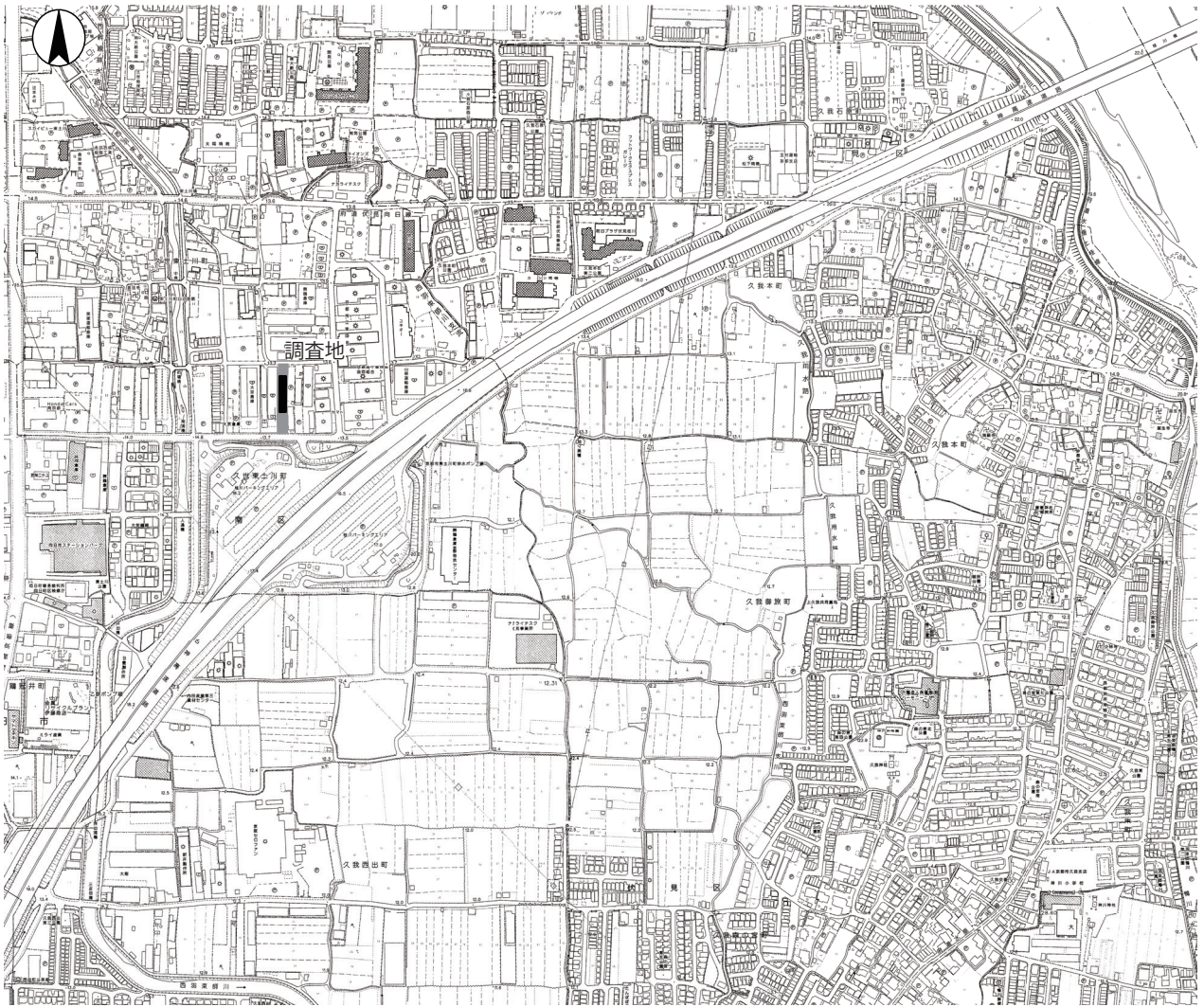


図2 調査地位置図2 (1:10,000) (国土地理院 25000分1地形図『京都西南部』『淀』を使用)

建物計画範囲は南北に長い調査地の中に長方形に設けられている。その範囲の内、北側から南へ長さ50m、幅は9mが調査対象範囲となった(図6)。また、当初は掘削土量が不明確で排土置き場が確保できなくなる状態を防ぐため、北半分を調査し、終了後に反転して南半分を調査する予定であった。北半分の調査が進行するにつれ、南半分の排土も置くことが可能であると判明したため、長岡京期の遺構完掘後に南半分も重機掘削し全体調査に切り替えた。

基準点は H30NA-01 X=-116945.188、Y=-25483.883、H=12.83、H30NA-02 X=-116944.970、Y=-25494.031、H=12.83、H30NA-03 X=-116997.534、Y=-25495.485、H=12.85、H30NA-04 X=-117000.028、Y=-25484.104、H=12.85 を設置した。

平成30年4月11日に調査区設定、仮設フェンスの設置、仮設ハウス、トイレ、バックホー、調査道具類の搬入等を行った。その後、調査区北側から重機掘削を開始した。

平成30年4月13日に重機掘削が終了し、遺構検出作業を行った。長岡京期の遺構、中世、近世、長岡京期以前の遺構を同一面にて検出した。

平成30年4月16日に写真撮影を行ない、中世、近世の遺構から掘削を開始した。

平成30年4月20日までに中世、近世の遺構掘削を終了し写真撮影を行った。写真撮影の後、長岡京期の遺構の掘削を開始した。

平成30年4月26日には長岡京期の遺構が終了し、写真撮影をした。上述したように調査方針が切



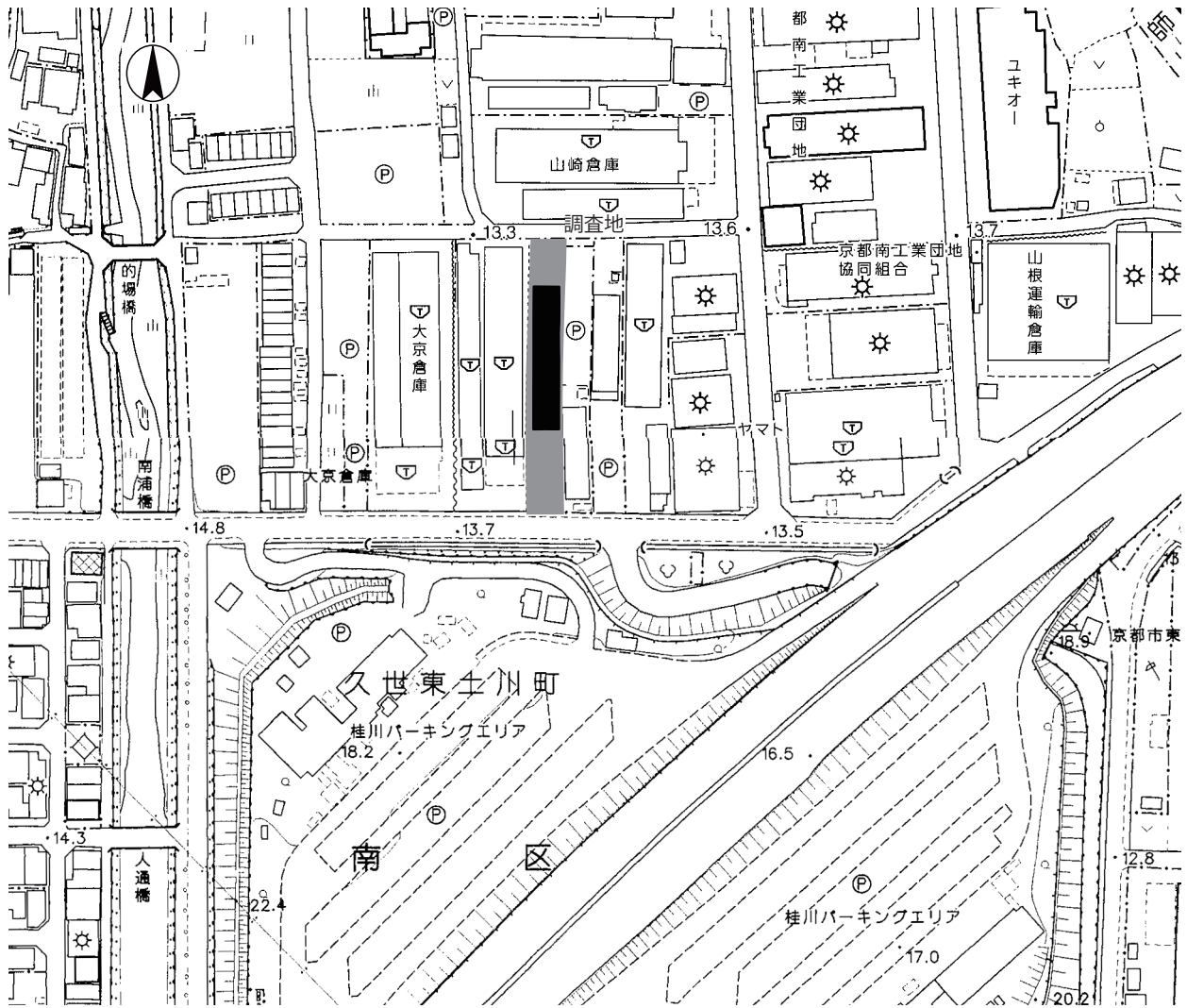


図3 調査地位置図3 (1:2,500) (京都市都市計画基本図1:2,500『久世』『久我』に加筆)

り替わったため、調査開始時に北壁、東壁に設定した排水用の側溝を整形し北半分の土層断面の記録を行った。

平成30年5月1日より南半分の重機掘削を開始した。同時に終了部分から遺構検出作業を開始した。

平成30年5月8日までに重機掘削は終了し、遺構検出作業、写真撮影も終えた。

平成30年5月9日から中世、近世の遺構掘削を開始した。5月12日までに掘削は終了し、写真撮影も終了した。

平成30年5月14日には長岡京期の遺構掘削を開始した。長岡京期の溝は中世の溝によって西肩や内部が数か所切られていた。5月16日までに掘削は終了し写真撮影も終了した。

平成30年5月17日より長岡京期以前の遺構掘削を開始した。長岡京期、中世、近世の遺構埋土は灰色系統を主体としており、土質も類似していた。これら遺構は色合いや土質の違い、一部切り合い関係もあったため、長岡京期以前の遺構と判断したものである。

中には調査区南東にて検出した、当初土坑と考えていた遺構が、精査の結果、長岡京期の柱穴の抜取痕となった遺構もあった。5月22日までに掘削が終了し、写真撮影も終了した。

平成30年5月24日、遺構面として扱っていた土層の中の一部には遺物が含まれる土層がいくつかあった。それらの土層は調査区北側から南側にかけて現れていた。特に南半では範囲が広がったため、南半を全体的に掘削し、下面の確認を行うこととなった。それに先立ち、調査区東壁側を重機にて断削



図4 調査区作業風景（南から）



図5 調査区作業風景（南から）

ことが確認できた。調査区南側を全体的に遺構面から10～15cm程を掘削したが、土層断面で確認できた流路状の堆積の平面形は明確に確認できなかった。

2018年5月26日には北側の遺物を含む層の掘削を行った。南半と異なり、遺構面から流路状の平面形が確認できたため、それを踏まえて掘削していたが、掘削後、やや大きめの流路の南側を小さめの流路がきっている状況が確認できた。それらの流路の上に堆積していたものが遺構面で流路状をなしていたことが判明した。5月27日も引き続き同じ作業を行った。流路状の平面形は3条あったため、残り2条の掘削であったが、26日の結果を考え、まず、遺構面に現れている流路状の堆積を掘削することとした。この2条の掘削後には南側のものとは違い、やや縮まるが同じような平面形で流路を検出した。

2018年5月28日から調査区内の埋め戻し作業を開始した。5月31日までに埋め戻しは完了、その間に仮設フェンスの撤去作業、仮設ハウス、トイレの搬出作業を行った。

2018年5月31日にバックホーの搬出が完了し、現地での作業を終了した。

尚、遺構の平面実測、断面実測などの記録作業は遣り方及びトータルステーションにて随時行った。

#### 《参考文献》

(註1) 財団法人京都府埋蔵文化財調査センター『京都府遺跡調査報告書 第28冊〈本文編〉〈図版編〉』2000年

(註2) 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所、公益財団法人向日市埋蔵文化財センター、

長岡京市立埋蔵文化財調査センター、大山崎町生涯学習課文化芸術係の各機関の発掘調査成果、研究成果による長岡京条坊復元案とその考察による。

以下、当報告書の条坊復元図および呼称はこれらに従う。

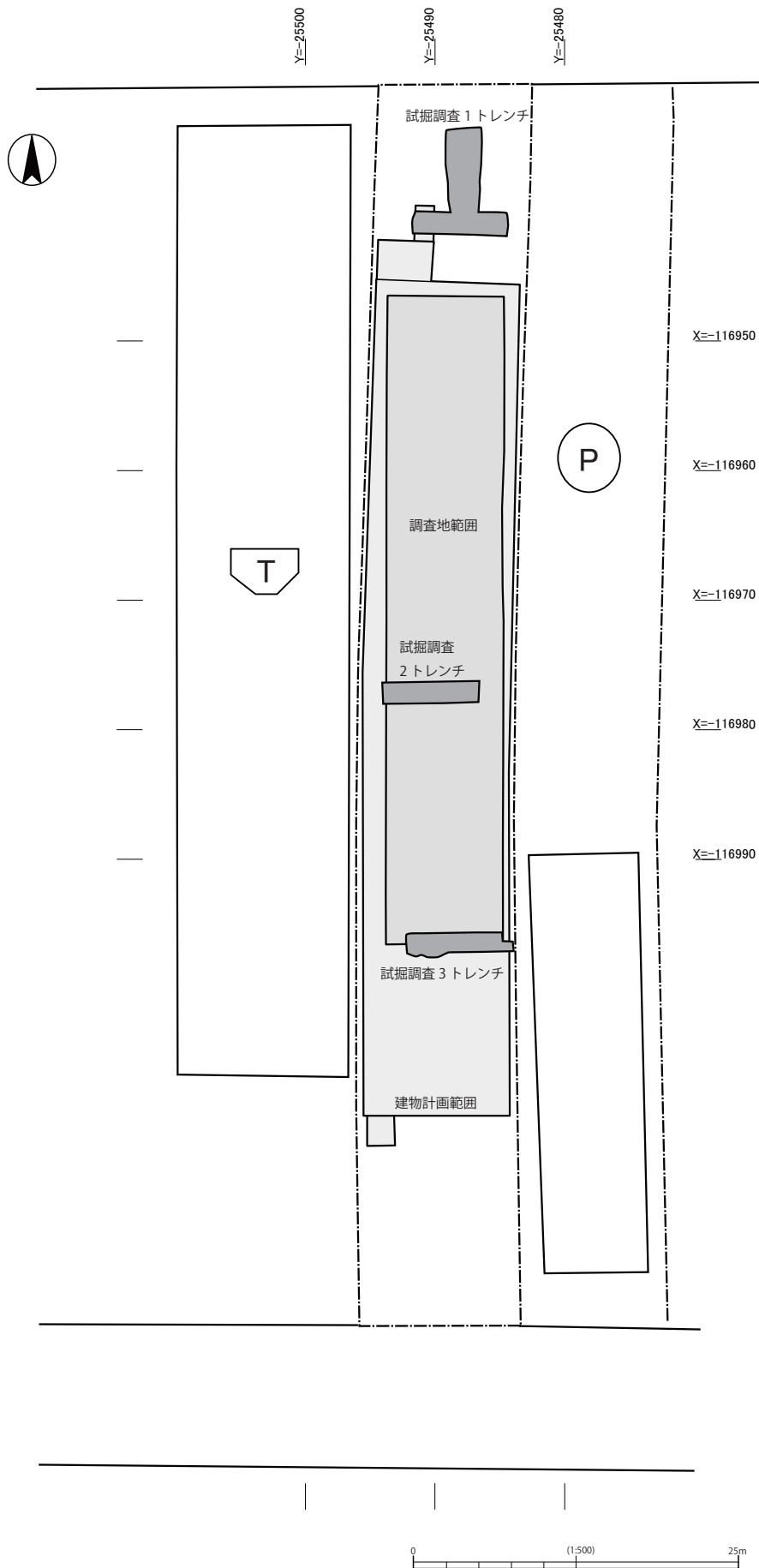


図 6 計画範囲と試掘・調査区配置図 (1:500)

## 第2章 位置と歴史的環境

当調査地は長岡京条坊復元図によると、左京二条四坊一町に相当し、東三坊大路の東側に位置している。また、弥生時代から古墳時代の集落跡である東土川遺跡にも相当する。現在の行政区分では京都市南区久世東土川町 366-1 に属する。東側には桂川が、西側には西羽東師川が流れる。直ぐ南側には名神高速道路の桂川パーキングエリアがある。地形的に低地であり、また桂川の氾濫原上にある。

長岡京造営以前の桂川右岸地域<sup>(註3)</sup>では、旧石器時代から数か所で集落が営まれていた。縄文時代から弥生時代にかけて新たに形成された集落も加わり点在していたとみられ、その中の1つに東土川遺跡が含まれている。そして、古墳時代になっても集落は途絶えることなく営まれ、奈良時代を越えても続く集落もあった。その後、奈良時代の末期には桓武天皇によって、平城京に替わる新都として長岡京が造営される。

長岡京は桓武天皇の延暦三年（784年）11月に平城京から遷都され、延暦十三年（794年）10月に平安京に遷都されるまでの約10年間と短期間であったが都として存在した。計画的な条坊による地割によって施工され、地形的な制約を受けていた<sup>(註4)</sup>が都城として機能を十分に有していた。

遷都に先立ち、延暦三年五月に藤原小黒麻呂、藤原種継等八名を「(人名略) 於山背國。相乙訓郡長岡村之地。為遷都也。」(『続日本紀』)とあるように、長岡の地に向かわせ視察させている。

六月には藤原種継以下十数名を造長岡宮使とし、「己酉。(中略) 於是。經始都城。營作宮殿。」(『続日本紀』)とあるように造営が開始される。その後、「壬子。(中略) 又今年調庸。并造宮工夫用度物。仰下諸國。令進於長岡宮。」と税や造営に必要な物を長岡宮に集めている。また、「壬戌。有勅。為造新京之宅。以諸國正税六十八万束。賜右大臣以下。參議已上。及内親王。夫人。尚侍。各有差」(『続日本紀』)と高位者に移転費用を下賜されている。そして「丁卯。百姓私宅。入新京宮内「亦」五十七町。當國正税四万三千束餘。賜其主。」(『続日本紀』)と長岡宮、京内五十七町に入る在地の住民に移転費用を下賜されている。

七月には「癸酉。仰阿波。讃岐。伊豫三國。令進造山崎料(原文は米に斤)材」(『続日本紀』)とある。

十一月には「戊申。天皇移幸長岡宮。」(『続日本紀』)とあり、宮は遷される。

長岡の地が都に選定された理由に『続日本紀』延暦七年（788年）九月庚午では水陸の便の良さが挙げられている。

しかし、早くも『日本後紀』によると延暦十二年（793年）正月には再び遷都するため藤原小黒麻呂、紀古佐美等を山背国葛野郡宇太村に向かわせ視察させている。そして間もなく宮が壊され遷都の準備が始まる。翌、延暦十三年十月に「辛酉。車駕遷于新京。」(『日本後紀』)とあり、長岡宮から遷られた。

長岡京廃都後には山城国府が設置されるが、その時期、集落は官衙や寺院付近に限定的にあったようで、それから徐々に分散し始め、拡大し周辺は耕地化していった<sup>(註5)</sup>。

当調査地を含む長岡京左京二条四坊一町内において確認した範囲で発掘調査は実施されていないようだが、周辺では西羽東師川改修に伴った発掘調査(図7-3、5-14、表1)、名神高速道路の桂川パーキングエリア建設に伴っての発掘調査(図7-15、表1)が広範囲で長期間実施されている。他にも確認できた範囲で表1及び図7に示している。

15では左京二条三坊坊十四町、十五町、左京二条四坊二町、三町、六町、七町の範囲で発掘調査が実施された。長岡京の条坊関連遺構では東三坊大路と東四坊坊間西小路の東西側溝、二条条間北小路と

二条条間大路の南北側溝が検出しており、路面幅が確認されている。また、各町の東西幅、もしくは南北幅も確認されている。各町内で建物跡、柵列や町内溝などが多数検出されており、宅地利用の状況が垣間見れる成果がもたらされている。また、長岡京期以前としては、弥生時代の方形周溝墓、水田畦畔、道、環濠、溝、古墳時代の流路など東土川町遺跡に関連するとみられる遺構が広範囲で検出されている。

3、5~14 では左京一条三坊十町から十四町、左京二条三坊十一町、十四町から十六町の範囲で発掘調査が実施されている。長岡京の条坊関連遺構では東三坊坊間東小路の東西側溝、二条条間北小路の南北側溝、二条条間大路の北側側溝が検出されている。13 の調査においては東三坊坊間東小路の路面敷が検出されている。また、調査地によっては建物跡、溝などが検出されている。その他、縄文時代から近世に至るまでの遺構が確認されているが、弥生時代の遺構が検出された調査地は多く、方形周溝墓、溝、流路などが検出されている。

それら以外の表 1 に示した発掘調査においても、長岡京の条坊関連遺構、建物跡や、柵列などが検出されている。20 の左京三条三坊十五町、十六町、左京三条四坊一町、二町の発掘調査では、東三坊大路の東西側溝が検出されている。長岡京期以前の遺構では調査地によっては縄文時代から飛鳥時代までの遺構が検出されている。

#### 《参考文献》

(註 3) 以下の文献を参考に本文を記した。

京都市文化市民局 京都市遺跡地図提供システム

向日市埋蔵文化財センター 『向日市遺跡地図』、『向日市遺跡地名表』

長岡京市埋蔵文化財センター 『長岡京市の集落遺跡一覧表』

大山崎町生涯学習課文化芸術係 『大山崎町遺跡地図』『大山崎の遺跡一覧』

(註 4) 梅本康広「長岡京の条坊施工範囲と造営計画」『年報 都城 25』公益財団法人向日市埋蔵文化財センター 2014 年

國下多美樹『長岡京の歴史考古学研究』吉川弘文館 2013 年

(註 5) 山中 章『長岡京研究序説』塙書房 2001 年

表1 周辺調査地の概要（長岡京跡、長岡京期以前を中心に抽出）

番号	所在地	調査概要	参考文献
1	京都市南区久世東土川町内	古墳時代の柱穴、流路を検出。	財団法人京都市埋蔵文化財研究所 『平成6年度 京都市埋蔵文化財調査概要』1996年
2	京都市南区久世東土川町内	古墳時代の柱穴、土坑、溝等を検出。	財団法人京都市埋蔵文化財研究所 『平成6年度 京都市埋蔵文化財調査概要』1996年
3	京都市久世東土川町	弥生時代から中世にかけての流路などを検出。	財団法人京都市埋蔵文化財研究所 『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』1996年
4	京都市南区久世大藪町554-4ほか	弥生時代の溝、落込、弥生時代から平安時代までの遺物を含む流路などを検出。	財団法人京都市埋蔵文化財研究所 『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』1994年
5	京都市南区久世東土川町178他	弥生時代の土坑、室町時代後半以降の東土川集落に関連する遺構などを検出。	財団法人京都市埋蔵文化財研究所 『平成10年度 京都市埋蔵文化財調査概要』2000年
6	京都市南区久世東土川町内	弥生時代の方形周溝墓、柱穴などを検出。	財団法人京都市埋蔵文化財研究所 『平成11年度 京都市埋蔵文化財調査概要』2002年
7	京都市南区久世東土川町178他	弥生時代の溝、長岡京期の東三坊坊間東小路の西側側溝、一条条間南小路の南側側溝などを検出。	財団法人京都市埋蔵文化財研究所 『平成10年度 京都市埋蔵文化財調査概要』2000年
8	京都市南区久世東土川町178他	弥生時代の溝などを検出。	財団法人京都市埋蔵文化財研究所 『平成10年度 京都市埋蔵文化財調査概要』2000年
9	京都市南区久世東土川町178他	古墳時代の土坑、長岡京期の東三坊坊間東小路の東西側溝などが検出。	財団法人京都市埋蔵文化財研究所 『平成11年度 京都市埋蔵文化財調査概要』2002年
10	京都市南区久世東土川町178他	弥生時代の土坑、古墳時代の土坑、長岡京期の一条大路の北側側溝、東三坊坊間東小路の西側側溝などを検出。	財団法人京都市埋蔵文化財研究所 『平成10年度 京都市埋蔵文化財調査概要』2000年
11	京都市南区久世東土川町地内	縄文時代の河川、奈良時代の溝、長岡京期の一条大路の南側側溝、建物跡、柵列、土坑などを検出。	財団法人京都市埋蔵文化財研究所 『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』1999年
12	京都市南区久世東土川町 京都市伏見区久我西出町	弥生時代から古墳時代の沼状遺構、溝、長岡京期の二条条間大路と二条条間北小路の南北側溝、建物跡などを検出。	財団法人京都市埋蔵文化財研究所 『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』1988年
13	京都市伏見区久我西出町 西羽東師川河川敷改修	弥生時代の方形周溝墓、弥生時代から古墳時代の湿地、長岡京期の東三坊坊間東小路の東側側溝、路面などを検出。	財団法人京都市埋蔵文化財研究所 『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』1991年
14	京都市伏見区久我西出町 西羽東師川河川敷	長岡京期の溝などを検出。	財団法人京都市埋蔵文化財研究所 『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』1989年
15	京都市南区久世東土川町	弥生時代の方形周溝墓、流路、長岡京期の条坊関連遺構、建物跡、門跡、柵列、井戸、溝などを検出。	財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 『京都府遺跡調査報告書 第28冊〈本文編〉〈図版編〉』2000年
16	京都市南区久世東土川町366-1	長岡京期の東三坊大路の西側側溝、一条大路の南側側溝などを検出。	京都市文化市民局文化芸術都市推進室 文化財保護課による2018年試掘調査
17	京都市伏見区久我本町11-36、11-287	弥生時代の流路を検出。	財団法人京都市埋蔵文化財研究所 『長岡京左京一条四坊十二町跡』2006年
18	京都市南区久世東土川町472-1、473、474、475、476	縄文時代から弥生時代の土坑、自然流路、長岡京期の建物跡、二条条間大路南北側溝、内溝などを検出。	財団法人京都市埋蔵文化財研究所 『長岡京左京二条四坊六・七町跡』2009年
19	京都市伏見区久我西出町1-28他地内	古墳時代の溝、流路、長岡京期の東四坊坊間小路の東側側溝、柱穴、溝などを検出。	財団法人京都市埋蔵文化財研究所 『長岡京左京二条四坊五・十二町跡』2014年
20	京都市伏見区久我西出町4-10他	縄文時代から弥生時代の溝、流路、長岡京期の東三坊大路の東西側溝、建物跡、柵列、溝などを検出。	財団法人京都市埋蔵文化財研究所 『昭和60年度 京都府埋蔵文化財調査概要』1988年
21	京都市伏見区久我西出町3-15、3-16、3-174	長岡京期の東三坊坊間小路の西側側溝、三条条間北小路の南側側溝、土坑などを検出。	財団法人京都市埋蔵文化財研究所 『長岡京左京三条三坊十町跡、鶏冠井清水遺跡』2013年
22	京都市伏見区久我西出町9-1、9-2	弥生時代の湿地、溝、古墳時代から飛鳥時代の溝、長岡京期の建物跡、柱穴列、溝などを検出。	財団法人京都市埋蔵文化財研究所 『長岡京左京三条四坊六町跡』2013年
23	京都市伏見区久我西出町8-8、8-9	長岡京期の建物跡、三条条間小路の南北側溝を検出。	財団法人京都市埋蔵文化財研究所 『長岡京左京三条四坊十・十一町跡』2008年

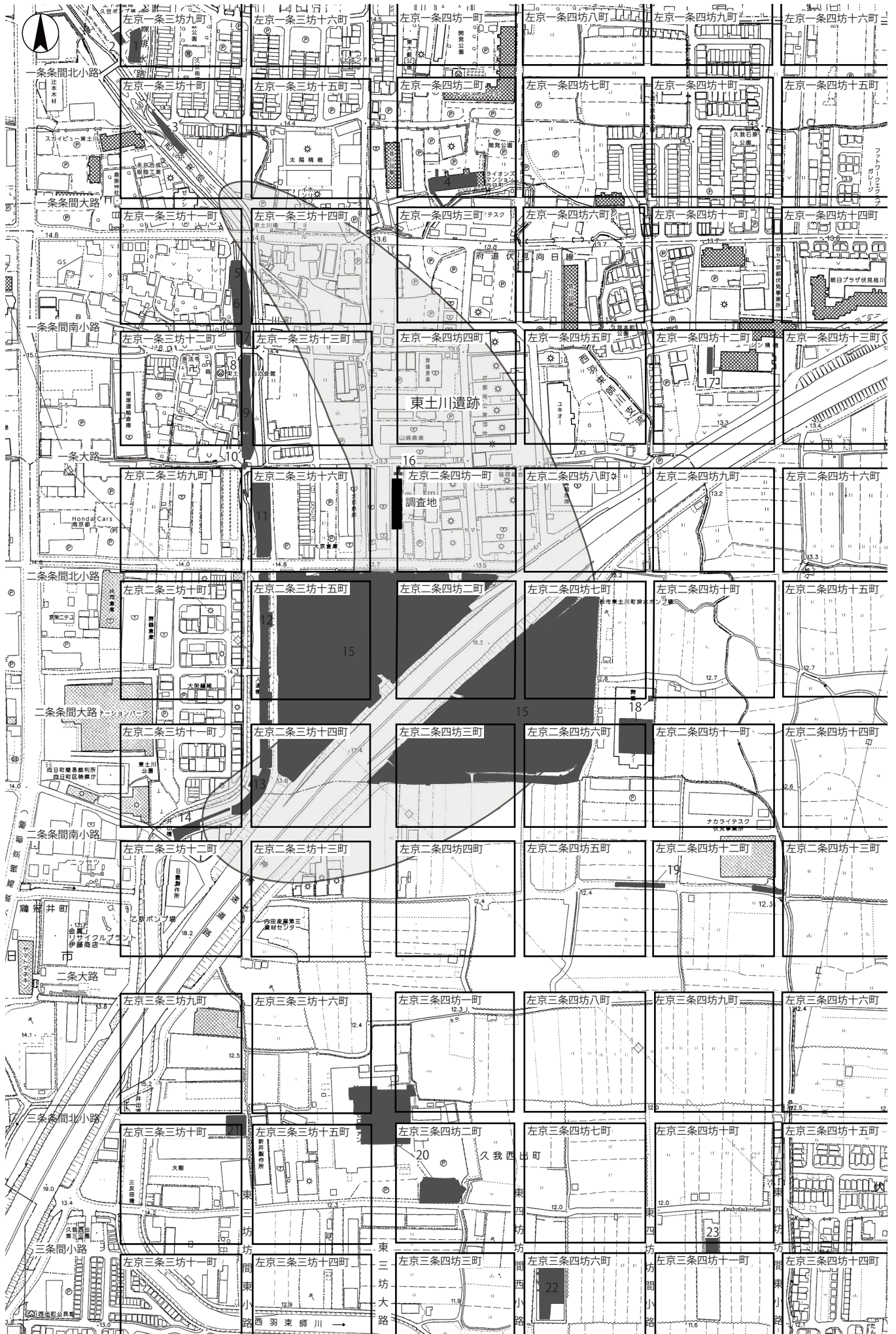


図7 周辺調査地位置図 (1:5,000) (京都市計画基本図1:2,500『久世』『久我』に加筆)

東土川遺跡の範囲は京都市文化市民局 遺跡地図提供システムを参照

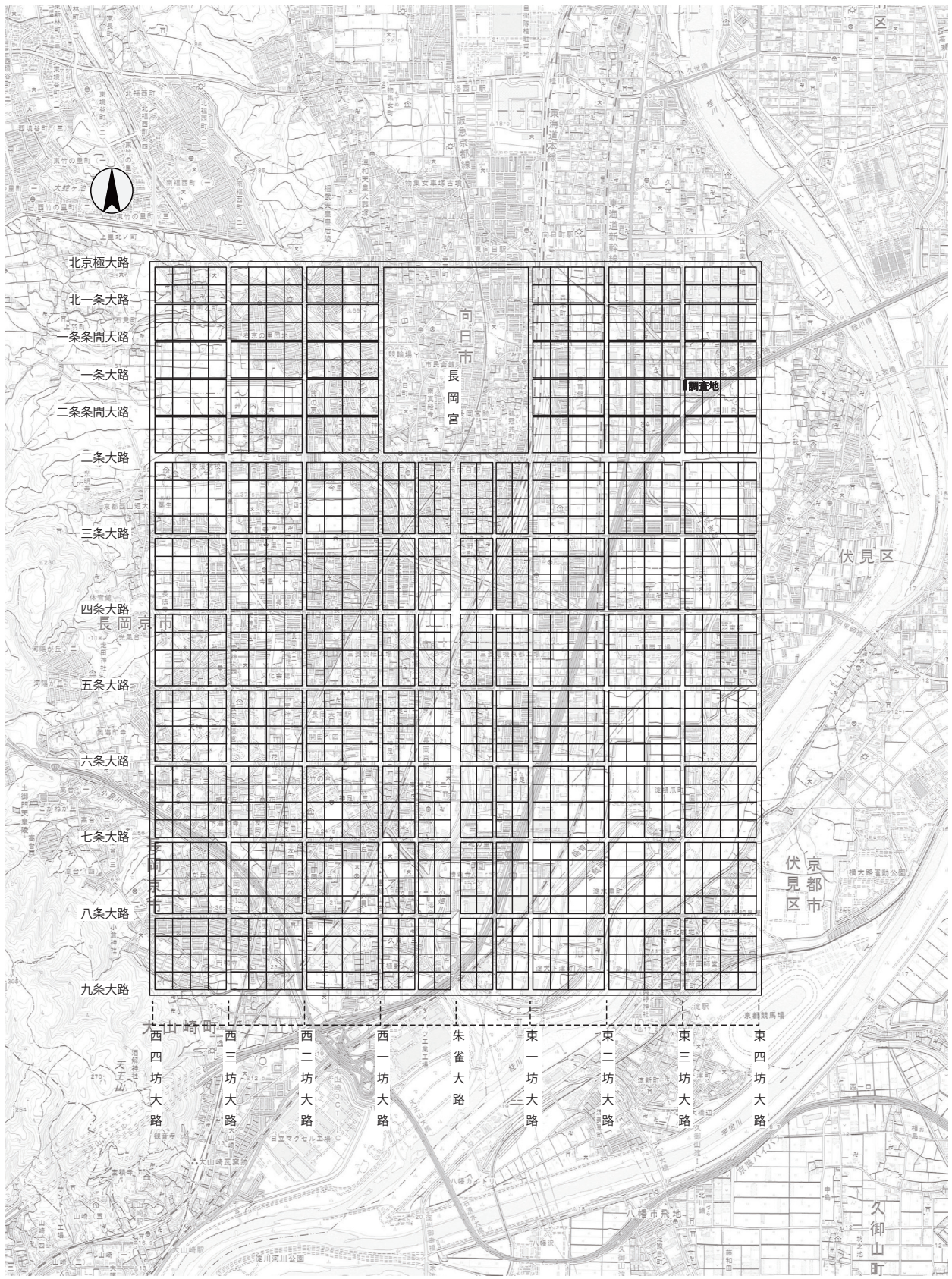


図8 長岡京条坊復元図 (1 : 40,000)



# 第3章 遺構

## 第1節 基本層序

調査区内における基本層序（図9）は現地表面から順に近現代耕作土（1層）、その下層に床土（2層）、黄褐色粘質土層（北壁11、東壁8層）である。調査区北側では黄褐色土層上で遺構を検出した。東壁9層以南の24、33、36、42、50、55、66、71、72層には奈良時代までの遺物が含まれており、それらは平面的には東西方向の流路状に確認できる（図12）。東壁9、10層掘削後には、ほぼ同じ位置で流路（流路1、2、図11）を検出した。24、33層下層では当初1つの流路と考えていたが掘削後に2つの流路（流路3、4、図11）が切り合っていることが確認できた。42、50、55、66、71、72層掘削後には北半の流路のような明確な平面形は確認できなかったが、断面から流路状の堆積が確認できる。流路1から3下層の灰色粘質土は共通しており、流路1よりも北側へ続く。また流路3、4下層の17層は河川堆積にみられる砂礫層であり、それは、東壁37層でもみられる。その状況から、調査区内には東西方向のかなり大きな流路も存在していたと考えられる。

## 第2節 遺構

検出した遺構は、古墳時代から奈良時代の柱穴、流路、長岡京期の柱穴列、溝、土坑、溝状遺構、鎌倉時代から江戸時代の耕作に伴う溝、柱穴、土坑である。いずれの遺構も床土（2層）直下で検出したため、そこを遺構面とし調査を行った。流路や溝の埋土は灰色系統であり、類似した土質であったが、明るさや含有物の違いや切り合い関係などから時期を判断した。流路1から4では遺物がほとんど出土していないが、流路1下層の15、17層で摩滅しているが弥生時代のものとみられる土師器が出土しているため、弥生時代以降に成立したものと考えられる。そこで、以下では流路1から4は長岡京期以前ではあるが、遺構面下層にて検出のため分けて1. 下層遺構と、従来の遺構面では一面で異なる時期の遺構を検出しており、2-1. 古墳時代から奈良時代、2-2. 長岡京期、2-3. 鎌倉時代から江戸時代と大きく3時期に分けて記す。

### 1. 弥生時代の遺構

弥生時代の遺構には流路がある（図11）。流路自体から遺物の出土は僅かであるが、古墳時代から奈良時代の流路に切られる東壁9層下層の10層掘削後に流路1、2、奈良時代の遺物を含む24、33層下層で流路4、17層以下で流路3を検出した。調査区南半では断面にて流路状の堆積は確認できたが、平面的には確認できなかった。流路1から4は西側から東に向かって深くなる。西側では鎌倉時代から江戸時代の耕作溝掘削後の地表面に流路上層が確認できた。

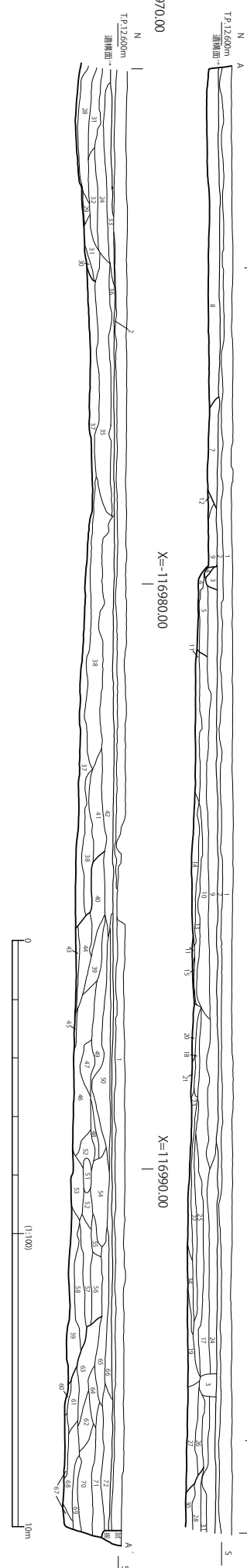
流路1（図10、11、図版6）調査区北側で検出した東西方向に延びる流路である。検出面で長さ8.6m、幅1.7～2.5m、深さ0.23～0.44mである。埋土は灰色粘質土が主体である。遺物は出土していない。

流路2（図10、11、図版6）調査区北側の流路1南側で検出した北西から南東方向に延びる流路である。検出面で長さ8.6m、幅2.2～3.5m、深さは0.5～0.7mである。埋土は灰色粘質土を主体とする。遺物は出土していない。西側は重機の移動の都合により掘削できなかったが、西壁側の耕作溝の底部となっ

X=116950.00

X=116960.00

X=116970.00



- 1. 10YR6/2 灰黄褐色粘質土 (粘土)
- 2. 2.5Y5/2 灰黄褐色粘質土 (粘土)
- 3. 2.5Y5/1 黄灰色粘質土に 10YR4/3 に近い黄褐色粘質土が混在に混ざる (鉄分粒を含む) (溝 2、溝 3)
- 4. 3.5Y5/1 灰褐色粘質土に 10YR4/4 褐色粘質土がわずかに混ざる (溝 2、溝 3)
- 5. 10YR/1 褐色粘質土に 10YR4/4 褐色粘質土がわずかに混ざる (溝 1)
- 6. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土に 10YR4/4 褐色粘質土がわずかに混ざる (溝 1)
- 7. 10YR/2 灰黄褐色粘質土に 10YR4/2 灰黄褐色粘質土が混在に混ざる (鉄分粒を含む) (溝 1)
- 8. 10YR/6 黄褐色粘質土 (鉄分粒を含む)
- 9. 10YR/2 灰黄褐色粘質土に 10YR4/3 に近い黄褐色粘質土が混在に混ざる (鉄分粒を含む)
- 10. 2.5YR/1 褐色粘質土に 10YR4/6 褐色粘質土が混在に混ざる (鉄分粒を含む)
- 11. 10YR/1 褐色粘質土に 10YR4/6 褐色粘質土が混在に混ざる (鉄分粒を含む)
- 12. 10YR/1 褐色粘質土
- 13. 10YR/4 褐色粘質土に 10YR5/1 褐色粘質土が混在に混ざる
- 14. 10YR/1 褐色粘質土
- 15. 10YR/2 灰黄褐色粘質土に 10YR4/4 褐色粘質土がわずかに混ざる
- 16. 10YR/2 灰黄褐色粘質土に 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土が混在に混ざる
- 17. 10YR/3 に近い黄褐色粘質土に 10YR5/2 灰黄褐色粘質土が混在に混ざる (鉄分粒を含む)
- 18. 7.5YR/6 明褐色粘質土に 10YR4/2 灰黄褐色粘質土が混在に混ざる
- 19. 10YR/1 10YR/3/1 黒褐色粘質土に 7.5YR/6 褐色粘質土が混在に混ざる (鉄分粒を含む)
- 20. 10YR/2 灰黄褐色粘質土に 10YR5/6 褐色粘質土が混在に混ざる (鉄分粒を含む)
- 21. 10YR/1 褐色粘質土
- 22. 10YR/2 灰黄褐色粘質土に 10YR4/4 褐色粘質土が混在に混ざる
- 23. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土に 10YR/1 褐色粘質土が混在に混ざる
- 24. 10YR/2 灰黄褐色粘質土に 10YR5/4 に近い黄褐色粘質土が混在に混ざる (鉄分粒を含む)
- 25. 10YR/1 褐色粘質土 (鉄分粒を含む)

- 26. 10YR5/2 に近い黄褐色粘質土に 10YR5/6 黄褐色粘質土が混在に混ざる
- 27. 10YR5/2 灰黄褐色粘質土に 10YR5/4 に近い黄褐色粘質土が混在に混ざる
- 28. 10YR/1 褐色粘質土に 10YR4/3 に近い黄褐色粘質土が混在に混ざる (溝 4)
- 29. 10YR/2 灰黄褐色粘質土 (溝 4)
- 30. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土に 7.5YR/6 褐色粘質土が混在に混ざる (溝 4)
- 31. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土に 10YR/4 暗褐色粘質土が混在に混ざる (溝 4)
- 32. 10YR/1 褐色粘質土に 7.5YR/6 褐色粘質土が混在に混ざる (溝 4)
- 33. 10YR/6 褐色粘質土に 10YR5/8 黄褐色粘質土との混在
- 34. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土
- 35. 10YR/6 褐色粘質土に 10YR5/8 黄褐色粘質土との混在
- 36. 10YR/4 に近い黄褐色粘質土に 10YR/6 褐色粘質土が混在に混ざる
- 37. 10YR/2 暗褐色粘質土に 10YR/3 に近い黄褐色粘質土が混在に混ざる
- 38. 10YR/3 暗褐色粘質土に 7.5Y4/3 褐色粘質土が混在に混ざる
- 39. 2.5Y5/1 黄褐色粘質土に 10YR5/2 灰黄褐色粘質土が混在に混ざる
- 40. 10YR/1 褐色粘質土に 2.5Y4/1 褐色粘質土が混在に混ざる
- 41. 10YR5/2 灰黄褐色粘質土に 10YR/3 褐色粘質土が混在に混ざる
- 42. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土に 7.5YR/6 明褐色粘質土が混在に混ざる
- 43. 2.5Y5/1 黄褐色粘質土
- 44. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土に 10YR5/2 灰黄褐色粘質土が混在に混ざる
- 45. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土
- 46. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土
- 47. 10YR5/2 灰黄褐色粘質土 (φ4-5 cm程の礫を含む)
- 48. 7.5YR/2 灰黄褐色粘質土 (φ4-5 cm程の礫を含む)
- 49. 10YR5/2 灰黄褐色粘質土に 7.5YR/6 褐色粘質土が混在に混ざる
- 50. 10YR/1 褐色粘質土に 7.5YR/6 褐色粘質土が混在に混ざる

- 51. 7.5YR/2 黒褐色粘質土
- 52. 5Y4/2 灰黄色粘質土
- 53. 10YR/1 褐色粘質土に 7.5YR/4 褐色粘質土が混在に混ざる
- 54. 7.5YR/2 灰黄褐色粘質土に 10YR5/1 褐色粘質土が混在に混ざる
- 55. 10YR/2 灰黄褐色粘質土に 10YR5/1 褐色粘質土が混在に混ざる
- 56. 10YR/4 褐色粘質土に 10YR5/2 灰黄褐色粘質土が混在に混ざる (鉄分粒を含む)
- 57. 10YR/3 に近い黄褐色粘質土に 10YR/3 に近い黄褐色粘質土が混在に混ざる
- 58. 10YR/1 褐色粘質土に 10YR4/6 褐色粘質土が混在に混ざる
- 59. 10YR/3 に近い黄褐色粘質土
- 60. 10YR/1 褐色粘質土
- 61. 10YR/2 灰黄褐色粘質土に 10YR/2 灰黄褐色粘質土が混在に混ざる
- 62. 10YR/3 に近い黄褐色粘質土に 10YR5/1 褐色粘質土が混在に混ざる
- 63. 10YR/2 灰黄褐色粘質土
- 64. 7.5YR/2 黒褐色粘質土
- 65. 10YR/2 灰黄褐色粘質土に 10YR5/6 黄褐色粘質土が混在に混ざる
- 66. 10YR/3 に近い黄褐色粘質土に 10YR5/6 明褐色粘質土が混在に混ざる
- 67. 10YR/1 褐色粘質土
- 68. 10YR/1 黒褐色粘質土に 10YR/3 に近い黄褐色粘質土が混在に混ざる
- 69. 10YR/1 褐色粘質土
- 70. 2.5Y3/2 黒褐色粘質土
- 71. 10YR/1 褐色粘質土に 10YR/6 褐色粘質土が混在に混ざる (鉄分粒を含む)
- 72. 10YR/2 灰黄褐色粘質土 (鉄分粒を含む)

調査区北壁土層断面図

Y=25490.00

Y=25485.00

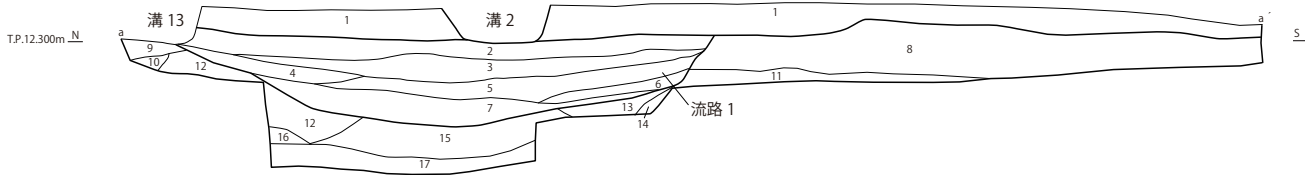


- 1. 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 (粘土)
- 2. 2.5Y6/2 灰黄褐色粘質土 (鉄分粒を含む)
- 3. 2.5Y6/1 黄灰色粘質土 (鉄分粒を含む) (溝 1)
- 4. 10YR/1 褐色粘質土に 10YR5/4 に近い黄褐色粘質土がわずかに混ざる (溝 1)
- 5. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土 (鉄分粒を含む)
- 6. 2.5Y6/2 灰黄褐色粘質土に 10YR4/4 褐色粘質土が混在に混ざる (鉄分粒を含む) (溝 1)
- 7. 2.5Y5/1 黄灰色粘質土 (鉄分粒を含む)
- 8. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土と 7.5YR/6 褐色粘質土との混在 (鉄分粒を含む)
- 9. 2.5Y5/1 黄灰色粘質土に 2.5Y6/2 灰黄褐色粘質土がフロック状に混ざる (鉄分粒を含む)
- 10. 雜乱

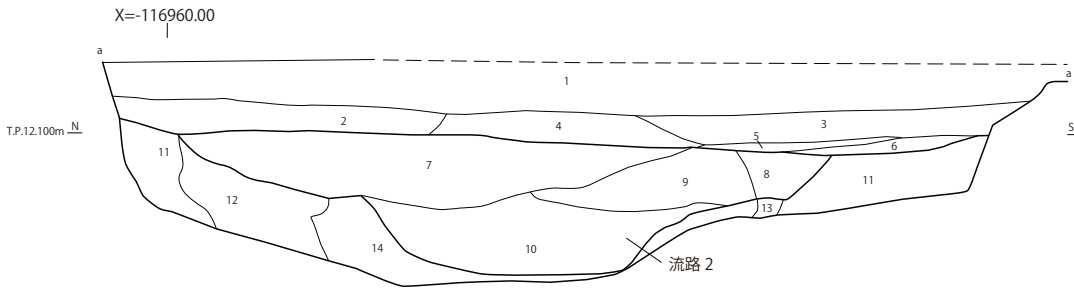
- 11. 10YR5/6 黄褐色粘質土 (鉄分粒を含む)
- 12. 10YR/4 に近い黄褐色粘質土に 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土がフロック状に混ざる (溝 1)
- 13. 2.5Y6/1 灰黄褐色粘質土 (鉄分粒を含む)
- 14. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土 (鉄分粒を含む) (溝 1)
- 15. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土に 7.5YR/6 褐色粘質土がフロック状に混ざる (溝 1)
- 16. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 (鉄分粒を含む) (溝 1)
- 17. 2.5Y6/2 灰黄褐色粘質土 (鉄分粒を含む) (溝 1)
- 18. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 (鉄分粒を含む) (溝 1)
- 19. 2.5Y6/1 灰黄褐色粘質土 (鉄分粒を含む)
- 20. 2.5Y6/1 灰黄褐色粘質土 (鉄分粒を含む)

- 21. 2.5Y6/1 灰黄褐色粘質土 (鉄分粒を含む)
- 22. 2.5Y5/1 黄灰色粘質土に 7.5YR/6 褐色粘質土がフロック状に混ざる (溝 4)
- 23. 10YR5/2 灰黄褐色粘質土 (溝 5)
- 24. 10YR5/1 褐色粘質土に 7.5YR/6 褐色粘質土がフロック状に混ざる (鉄分粒を含む) (溝 8)
- 25. 10YR5/1 灰黄褐色粘質土に 7.5YR/6 褐色粘質土がフロック状に混ざる (鉄分粒を含む) (溝 8)
- 26. 10YR5/2 灰黄褐色粘質土に 7.5YR/6 褐色粘質土がフロック状に混ざる
- 27. 2.5Y6/1 灰黄褐色粘質土 (鉄分粒を含む)

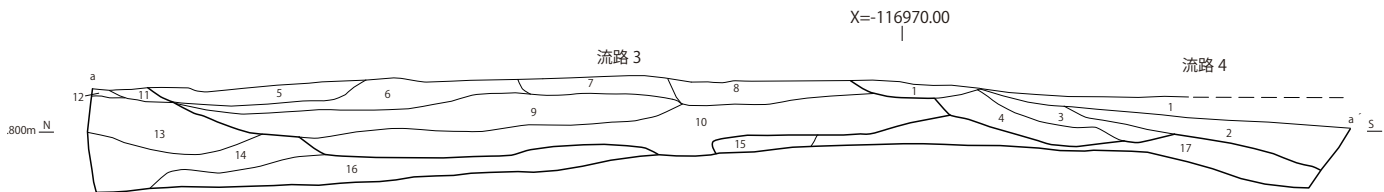
東壁土層断面図 (1:100)、北壁土層断面図 (1:50)



1. 10YR5/2 灰黄褐色粘質土に 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土が斑状に混ざる (鉄分粒を含む)
2. 5Y5/1 灰色粘質土細砂混、上層部に 10YR5/6 黄褐色細砂土が織状に混ざる [流路 1]
3. 2.5Y6/1 黄灰色粘質土細砂混 [流路 1]
4. 5Y4/1 灰色粘質土細砂混に 2.5Y3/2 黒褐色細砂土が混ざる [流路 1]
5. 5Y5/1 灰色粘質土に 2.5Y6/1 黄灰色粘質土が混ざる [流路 1]
6. 2.5Y6/2 暗灰黄色粘質土に 7.5YR5/6 明褐色細砂土が混ざる [流路 1]
7. 10YR6/1 灰色粘質土に 7.5Y6/1 灰色細砂が混ざる [流路 1]
8. 7.5YR4/1 褐灰色粘質土に 10YR4/4 褐色粘質土が斑状に混ざる
9. 10YR4/1 褐灰色粘質土
10. 5Y5/2 灰オリーブ色粘質土細砂混
11. 10YR5/1 褐灰色粘土に 10YR4/6 褐色粘質土が斑状に混ざる
12. 5Y5/1 灰色粘質土細砂混に 10YR6/6 明黄褐色細砂が混ざる
13. 7.5Y6/1 灰色粘質土に 7.5Y6/1 灰色細砂が混ざる
14. 2.5Y5/3 黄褐色粘質土に 7.5Y6/1 灰色細砂が混ざる
15. 10Y5/1 灰色粘質土に 15Y4/2 灰オリーブ色細砂が混ざる
16. 2.5Y5/3 黄褐色粘質土に 7.5YR5/8 明褐色細砂土が混ざる
17. 10Y4/1 灰色粘質土に 7.5Y5/1 灰色細砂土が混ざる



1. 10YR5/2 灰黄褐色粘質土に 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土が斑状に混ざる (鉄分粒を含む)
2. 2.5Y5/1 黄灰色粘質土細砂混に 10YR5/6 黄褐色細砂土が混ざる
3. 2.5Y4/1 黄褐色粘質土
4. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土に 10YR5/6 黄褐色細砂土が混ざる
5. 10YR3/2 黒褐色粘土
6. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土
7. 5Y4/1 灰色粘質土に 10YR4/6 褐色細砂土が斑状に混ざる [流路 2]
8. 5Y5/1 黄灰色粘質土 [流路 2]
9. 5Y4/1 灰色粘質土と 2.5Y5/1 黄灰色粘質土との混土 [流路 2]
10. 5Y4/1 灰色粘質土に 5Y4/2 灰オリーブ色粘質土が混ざる [流路 2]
11. 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土
12. 5Y5/1 灰色粘質土砂礫混
13. 5Y5/1 黄灰色粘質土に 10YR5/6 黄灰色粘質土が混ざる
14. 7.5Y6/1 灰色粘質土



1. 10YR5/2 灰黄褐色粘質土に 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土が斑状に混ざる (鉄分粒を含む) [流路 4]
2. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 [流路 4]
3. 10YR4/2 灰黄褐色礫混粘質土 [流路 4]
4. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土に 2.5Y4/4 褐色細砂が混ざる [流路 3]
5. 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂に 10YR4/1 褐灰色粘質土が斑状に混ざる [流路 3]
6. 2.5Y4/2 灰オリーブ色礫混細砂土 [流路 3]
7. 10YR3/1 黒褐色礫混粘質土に 7.5YR4/6 褐色粘質土が混ざる [流路 3]
8. 10YR5/2 灰黄褐色粘質土に 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土が斑状に混ざる [流路 3]
9. 2.5Y4/2 暗灰黄褐色粘質土に 5YR4/6 褐色細砂土が混ざる [流路 3]
10. 10YR4/2 灰黄褐色礫混粘質土と 7.5YR3/4 暗褐色粘質土との混土 [流路 3]
11. 10YR4/1 褐灰色粘質土
12. 10YR4/6 褐色粘質土
13. 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土
14. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土細砂混
15. 2.5Y5/1 黄灰色粘質土
16. 10Y5/1 灰色粘質土
17. 10YR4/1 褐灰色砂礫土

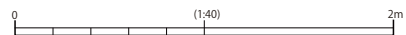


図 10 流路 1、2、3、4 土層断面図 (1 : 40)



Y=-25500

Y=-25490

Y=-25480

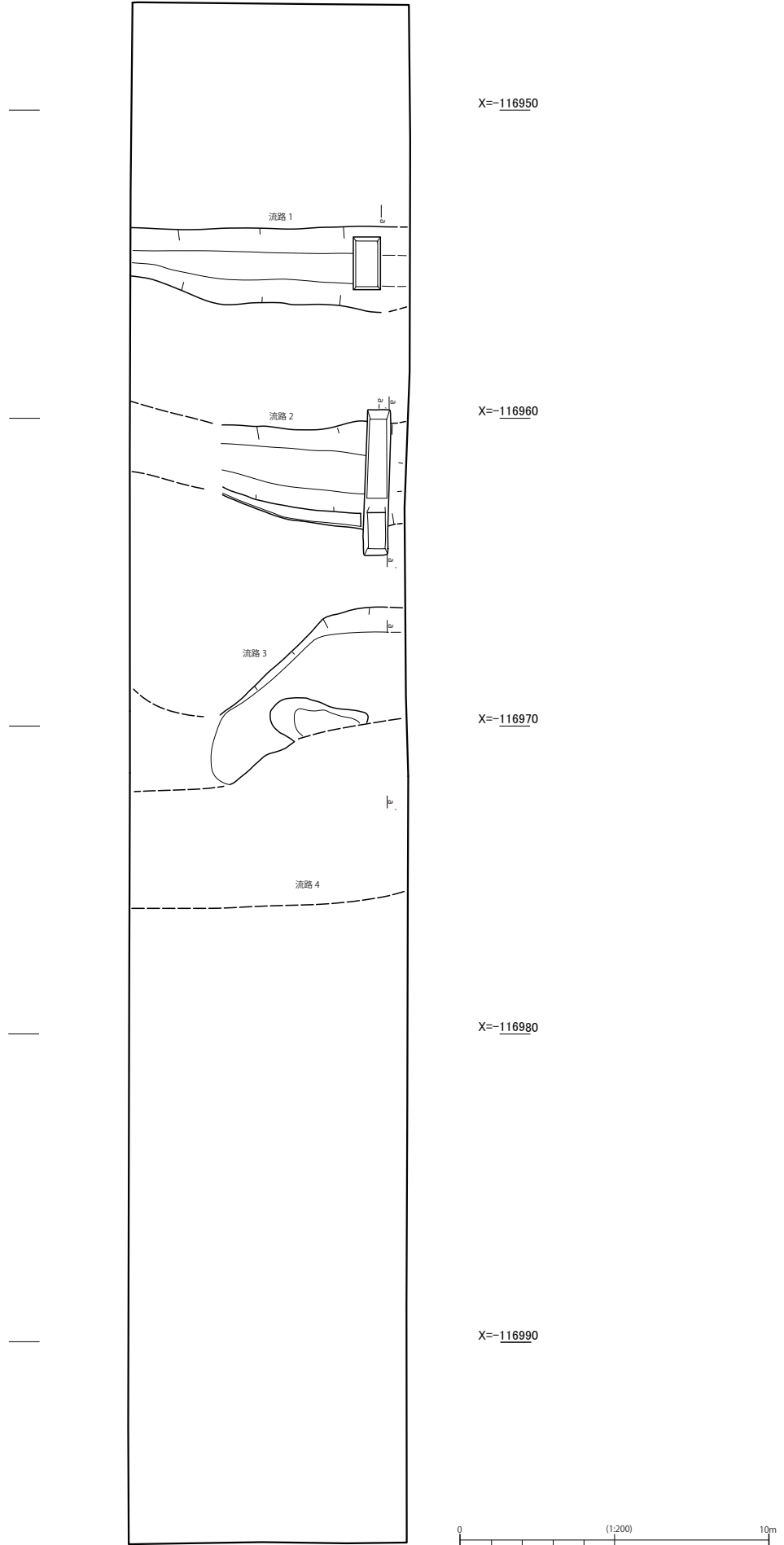


图 11 1. 下層遺構平面図 (1 : 200)



Y=-25500

Y=-25490

Y=-25480

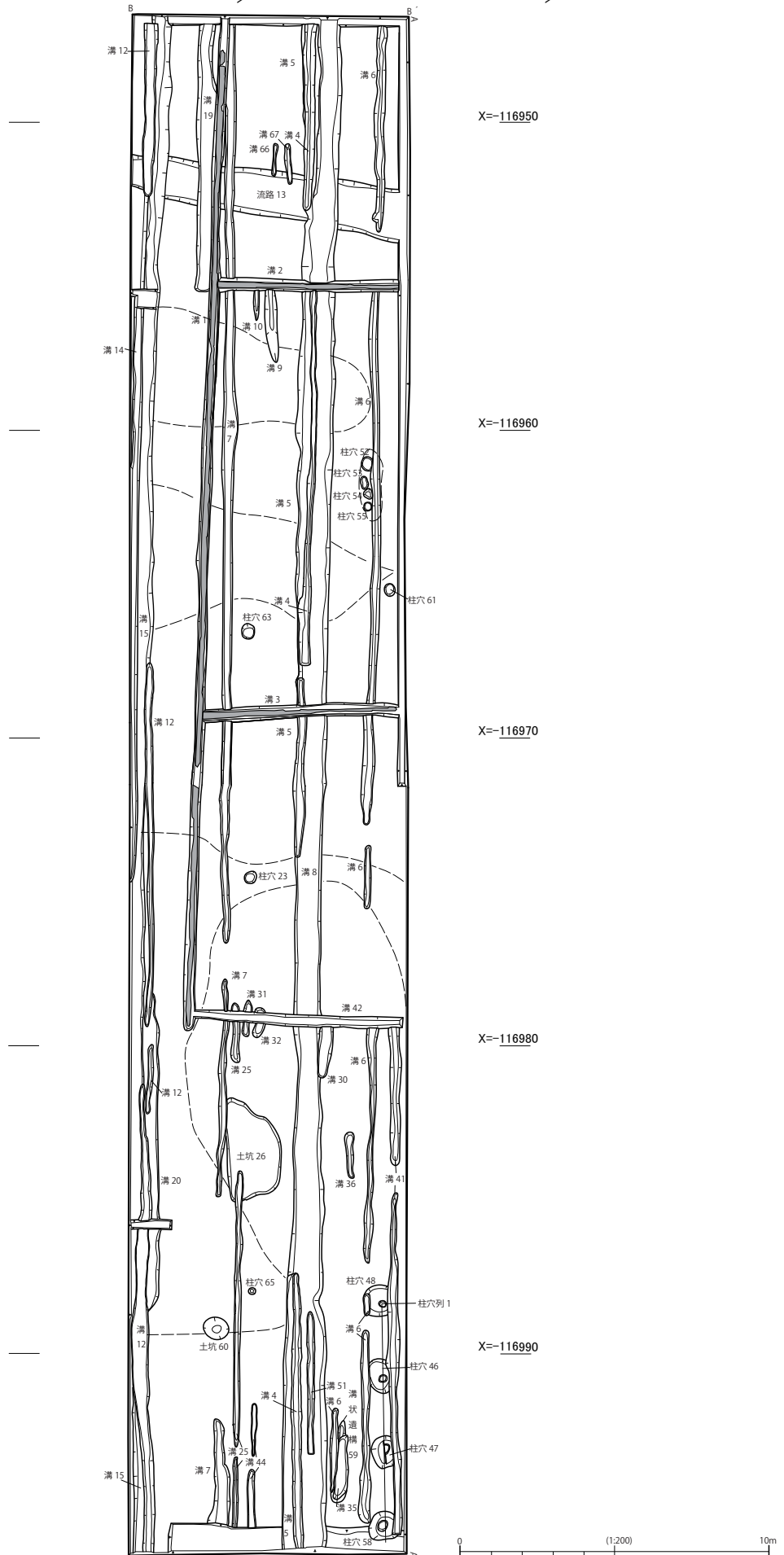


图 12 2. 上層遺構全体平面図 (1:200)



Y=-25500

Y=-25490

Y=-25480

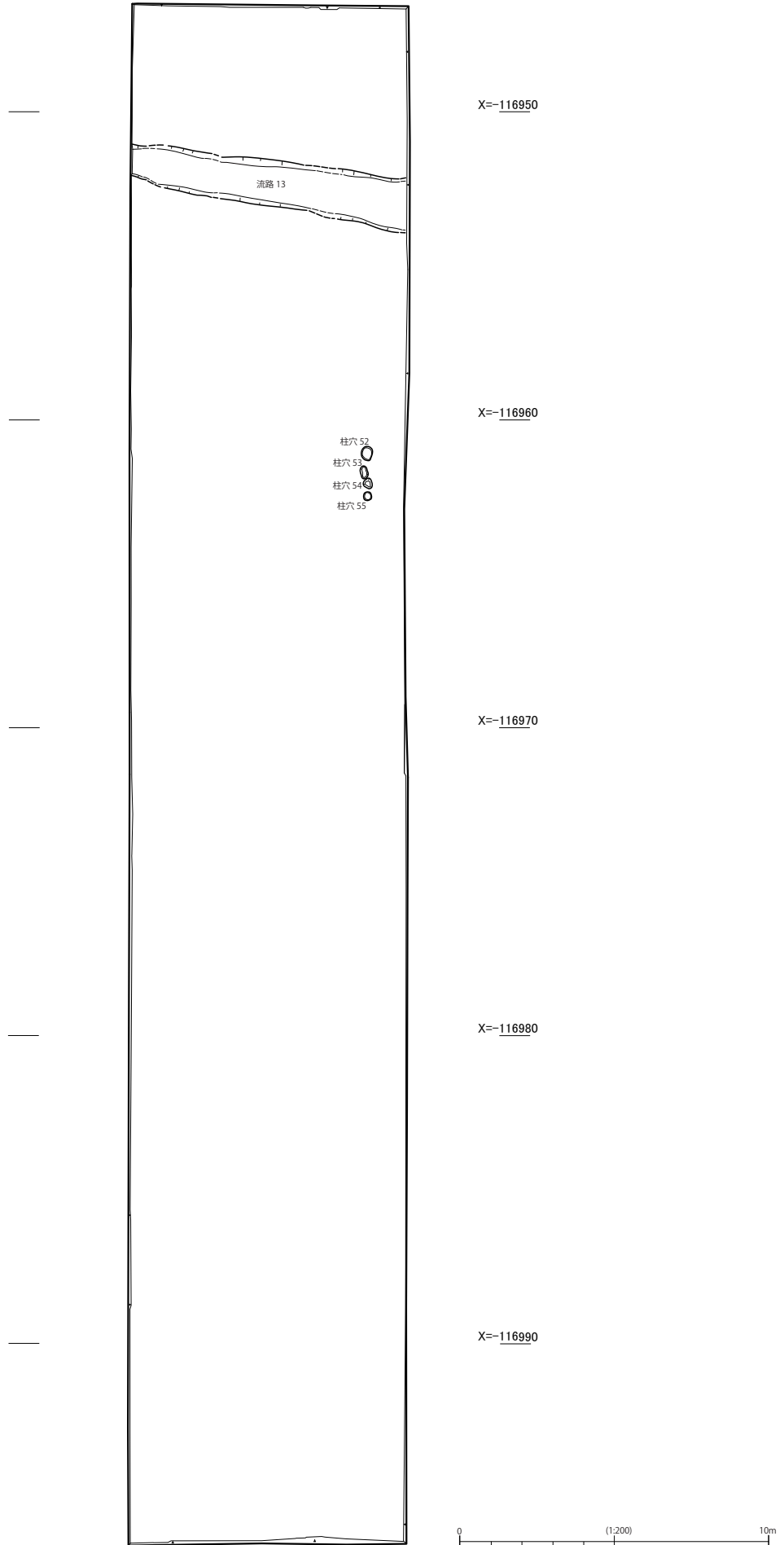


図 13 2-1. 古墳時代から奈良時代の遺構平面図 (1 : 200)

ていた層が7層であると確認できたため、調査区内全域をつなくことができた。

流路3(図10、11、図版7) 調査区中央で検出した東西方向に延びる流路である。南側は流路4に切られる。検出面で長さ8.8m、幅2.4～3.6m、深さ0.4～0.9mである。埋土は灰黄褐色粘質土に砂が混ざるものが主体である。遺物は土師器が出土している。西側は流路2と同様に西壁側の耕作溝の底部となっていた層が9層であると判断したため、調査区内全域をつないだ。

流路4(図10、11図、版7) 調査区中央で検出した東西方向に延びる流路である。検出面で長さ8.8m、幅3.8～5.7m、深さ0.6～0.8mである。埋土は黄灰色粘質土が主体である。遺物は出土していない。西側は流路2、3と同様に西壁側の耕作溝の底部となっていた層が31層であると判断したため、調査区内全域をつないだ。

## 2-1. 古墳時代から奈良時代の遺構

古墳時代から長岡京造営前までの奈良時代の遺構には柱穴、流路がある。いずれも調査区北半でしか検出していない。柱穴は削平のためか浅いものであった。柱穴では弥生時代と古墳時代の遺物が、流路では古墳時代から奈良時代の遺物が混合して出土した。

柱穴52(図13、図版3) 調査区北半の西側で検出した楕円形の柱穴である。検出面で長軸は0.46m、短軸は0.37m、深さ0.1mである。埋土は黒褐色粘質土に細砂が混ざる。遺物は土師器、須恵器が出土している。

柱穴53(図13、図版3) 調査区北半の柱穴52の南で検出した楕円形の柱穴である。検出面で長軸は0.40m、短軸は0.23m、深さ0.3mである。埋土は黒褐色粘質土に細砂が混ざる。遺物は土師器、須恵器が出土している。

柱穴54(図13、図版3) 調査区北半の柱穴53の南で検出した楕円形の柱穴である。検出面で長軸は0.31m、短軸は0.28m、深さ0.05mである。埋土は黒褐色粘質土に細砂が混ざる。遺物は出土していない。

柱穴55(図13、図版3) 調査区北半の柱穴54の南で検出した円形の柱穴である。検出面で長軸は0.27m、短軸は0.25m、深さ0.04mである。埋土は黒褐色粘質土に細砂が混ざる。遺物は出土していない。

流路13(図13、14、図版3) 調査区北側で検出した北西から南東方向に延びる流路である。検出面で

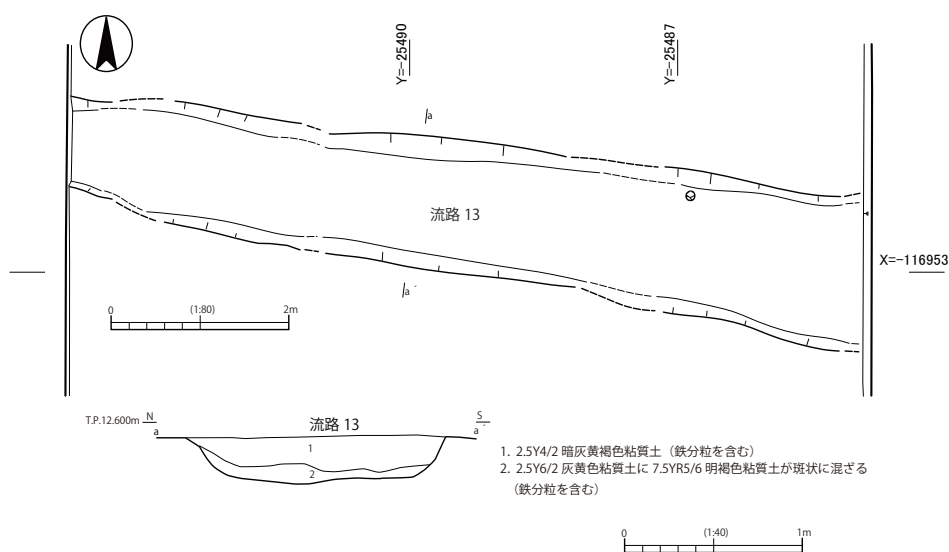


図14 流路13平面図(1:80)、断面図(1:40)

長さ 9.1m、幅 1.0～1.6m、深さ 0.1～0.3m である。埋土は灰黄褐色が主体である。遺物は土師器、須恵器、石製品が出土しており、南東部分からはほぼ完形の古墳時代の杯身が出土している。

## 2-2. 長岡京期の遺構

長岡京期の遺構は柱穴列、土坑、溝、溝状遺構、がある。溝以外は調査区南半で検出した遺構である。

柱穴列 1 (図 15, 16, 図版 3, 4, 7) 調査区南半の南西で検出した柱穴列である。東側上部を溝 41、西側上部を溝 6 に切られる。柱穴 46、柱穴 47、柱穴 48、柱穴 58 で構成され、南北 7.2m で 3 間以上になるとみられる。軸は北で西へ 1°程振れる。東側は調査区外のため 1 間以上であるか不明であり、また南側も調査区外のため全容は確認できていない。柱穴 48 は楕円形に近く、柱穴 46、47、58 隅丸方形に近い。長軸は 1.0～1.15m、短軸は 0.82～1.0m、深さ 0.5～0.6m である。いずれも柱は抜取られており、柱穴 48 は西向きに、柱穴 46、47、58 は南向きに柱が抜取られた痕跡がみられる。柱は若干沈んでいたようで、抜取られた際になったものか楕円形の痕跡が残る。短軸をみると 0.2～0.3m 程となる。埋土は抜取痕は黄褐色粘質土が主体で、掘方は褐灰色粘質土が主体である。遺物は柱穴 46 で土師器、柱穴 47 で土師器、柱穴 48 で土師器、瓦、石製品、柱穴 58 で土師器が出土している。土師器は掘方、抜取痕で出土しているが、細片が大多数で、摩滅している。瓦は柱穴 47 の抜取痕で出土している。

溝 8 (図 15, 17, 図版 2, 3) 調査区の西寄で検出した南北方向に延びる溝である。西肩は北側で東西に溝 2、南北に溝 4、5、16、18、中央で東西に溝 3、南北に溝 17、南側で東西に溝 42、南北に溝 49、50 に切られる。また、南側で溝上を南北に溝 51 によって切られる。南北共に調査区外へ延びる。検出面で長さ 49.6m、幅 0.8m、深さ 0.15～0.3m である。軸は北で 1°程東へ振れる。埋土は灰黄色から黄灰色粘質土が主体である。遺物は細片が大多数であるが土師器、須恵器、瓦が出土している。溝 13 を切っているため、古墳時代の須恵器が混入している。また、鎌倉時代以降の溝に切られていたためか、中世の青磁、瓦器、瓦質土器が混入している。

土坑 26 (図 15, 18, 図版 3) 調査区南半の東側で検出したやや大きめの土坑である。検出面で長軸は 3.2m、短軸は 1.8m、深さ 0.13～0.2m である。西側上部を溝 7、南側上部を溝 25 に切られる。埋土はにぶい灰黄褐色粘質土が主体である。遺物は土師器が出土しているが、表面剥離や摩滅したものが大多数である。

溝状遺構 59 (図 15, 図版 3) 調査区南半の柱穴列 1 の西側で検出した溝状の遺構である。検出面で長さ 1.23m、幅 0.13～0.21m、深さ 0.01～0.02m である。埋土は暗灰黄色粘質土である。遺物は土師器が出土している。

## 2-3. 鎌倉時代から江戸時代の遺構

鎌倉時代から江戸時代の遺構には、柱穴、土坑、溝がある。溝は、長岡京廃絶後、平安時代を経て中世に入り耕地化した際に掘削されたものがほとんどである。調査区を南北に縦断するものが数条あり、大多数が途切れ途切れのものであった。以下、主なものを記す。

溝 4 (図 17, 19, 図版 1) 調査区中央で検出した南北方向に延びる溝である。溝 5、13 上部、溝 8 の西肩、を切っている。南北共に調査区外へ延びる。途切れ途切れであるが、検出面で長さ 49.6m、幅 0.2～0.4 m、深さ 0.09～0.2m である。埋土は灰黄褐色粘質土が主体である。遺物は土師器、須恵器、白磁、瓦器、瓦が出土している。

溝 5 (図 17, 19, 20, 図版 1) 調査区中央で検出した南北方向に延びる溝である。上部は溝 4 に切られ





Y=-25500

Y=-25490

Y=-25480

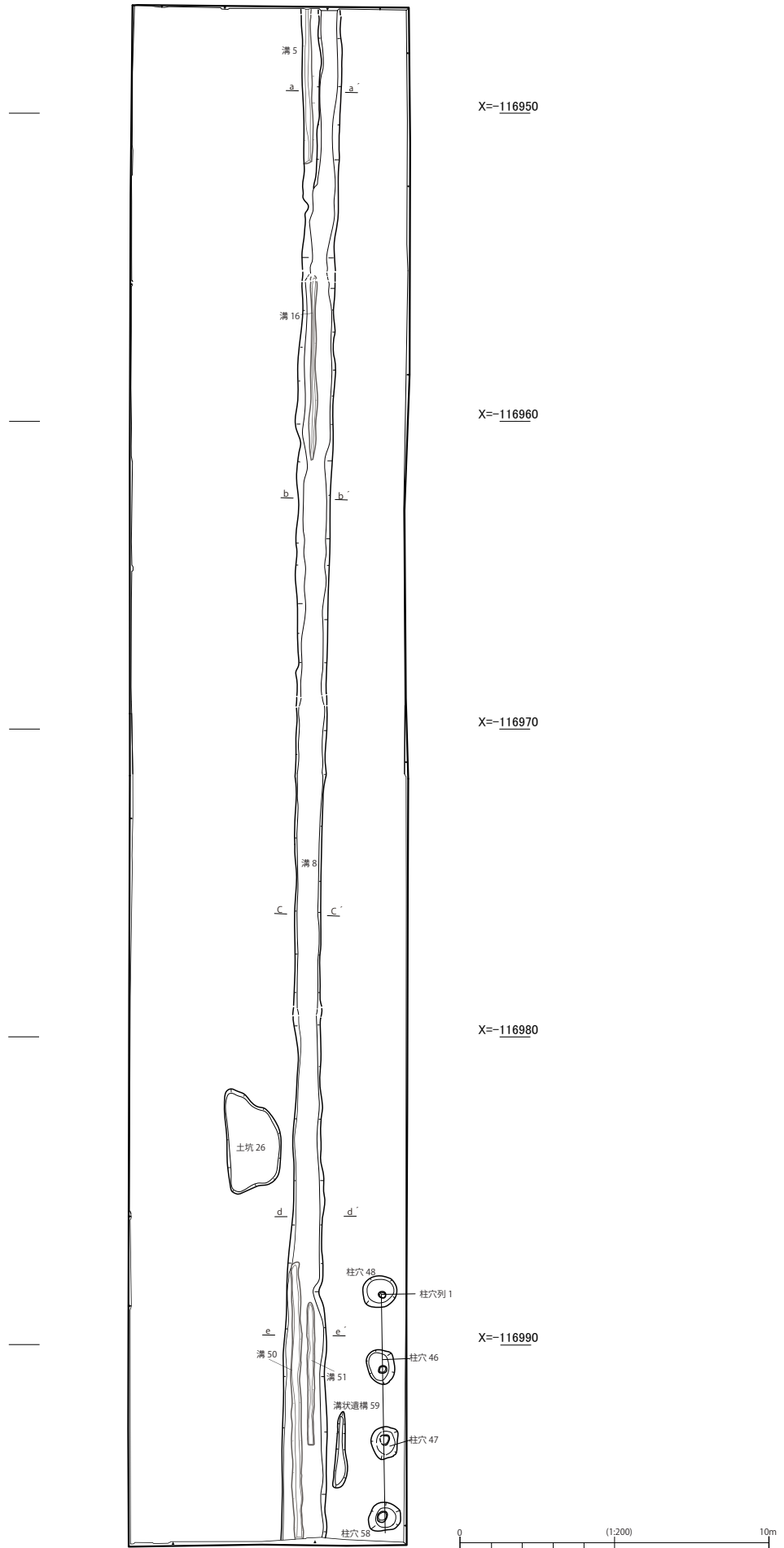


図 15 2-2. 長岡京期の遺構平面図 (1:200)

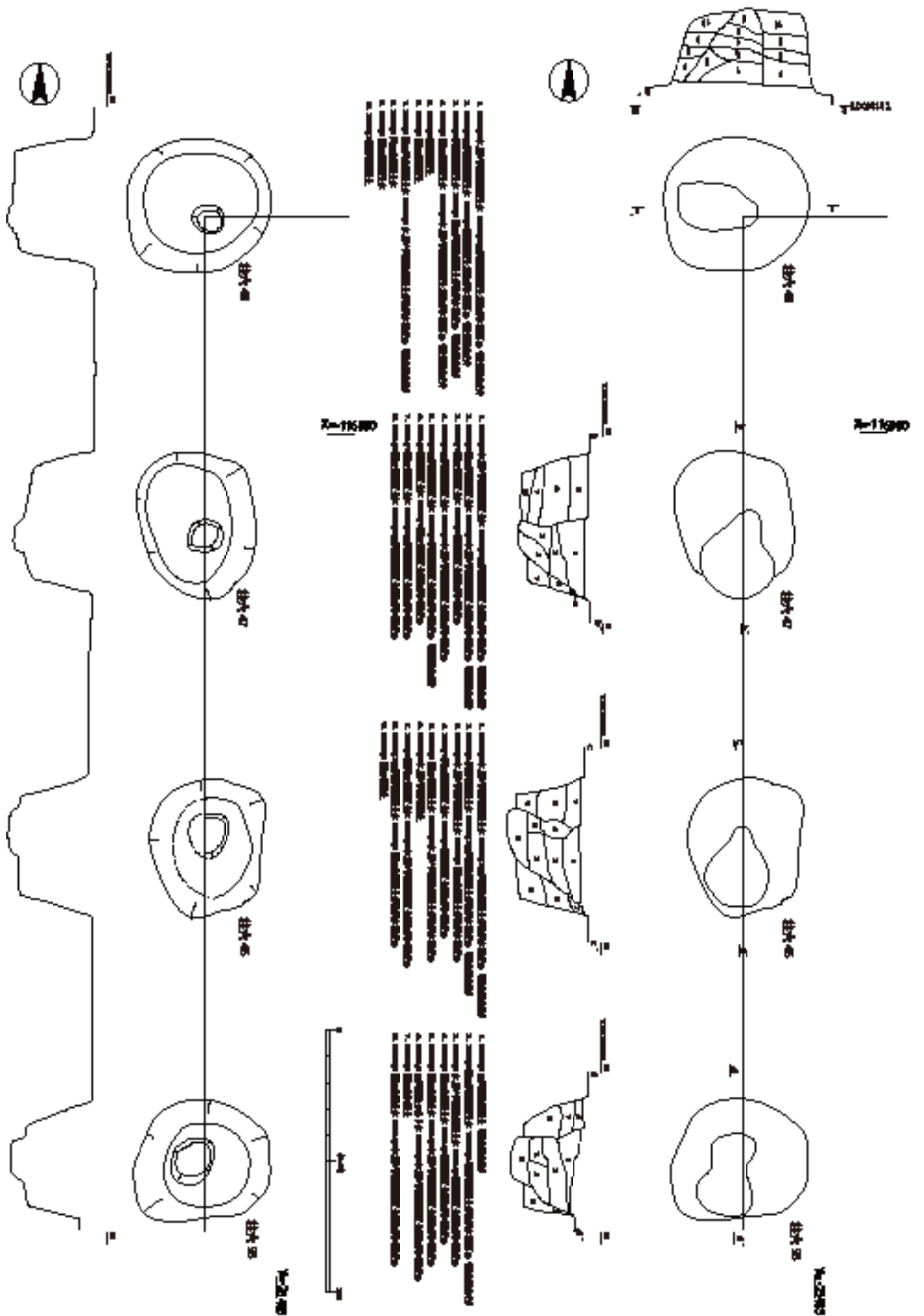


图 16 柱穴列 1 平面图、断面图 (1:40)



1. 2.5Y6/2 灰黄色粘質土に 7.5YR5/6 明褐色粘質土が斑状に混ざる (溝 4)
2. 10YR5/2 灰黄褐色粘質土 (溝 5)
3. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土に 10YR5/6 黄褐色粘土が斑状に混ざる (溝 8)
4. 2.5Y5/1 黄灰色粘質土に 10YR5/6 黄褐色粘質土が斑状に混ざる (鉄分粒含む) (溝 8)
5. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘土
6. 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土に 10YR4/6 褐色粘質土が斑状に混ざる



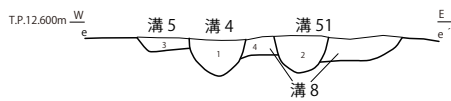
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土 (溝 4)
2. 10YR5/2 灰黄褐色粘質土に 10YR4/4 褐色粘土が斑状に混ざる (溝 5)
3. 2.5Y5/1 黄灰色粘質土に 10YR5/6 黄褐色粘土が斑状に混ざる (溝 8)
4. 10YR4/1 褐灰色粘質土に 10YR5/6 黄褐色粘質土が斑状に混ざる (鉄分粒含む)
5. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土に 10YR5/6 黄褐色粘土が斑状に混ざる



1. 2.5Y5/1 黄灰色粘質土に 10YR4/4 褐色粘質土が斑状に混ざる (鉄分粒を含む)
2. 10YR5/2 灰黄褐色粘質土に 10YR4/6 褐色粘土が斑状に混ざる (鉄分粒を含む)
3. 10YR4/1 褐灰色礫混粘質土に 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土が斑状に混ざる



1. 2.5Y5/1 黄灰色粘質土 (鉄分粒を含む)
2. 10YR5/2 灰黄褐色粘質土に 10YR4/4 褐色粘土がブロック状に混ざる
3. 10YR4/1 褐灰色礫混粘質土 (鉄分粒を含む)
4. 10YR4/2 褐灰色粘質土



1. 10YR5/2 灰黄褐色粘質土 (鉄分粒を含む) (溝 4)
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土 (鉄分粒を含む) (溝 51)
3. 2.5Y6/2 灰黄色粘質土 (鉄分粒を含む) (溝 5)
4. 10YR5/1 褐灰色粘質土に 10YR4/6 褐色粘質土が斑状に混ざる (鉄分粒含む) (溝 8)

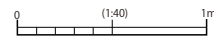
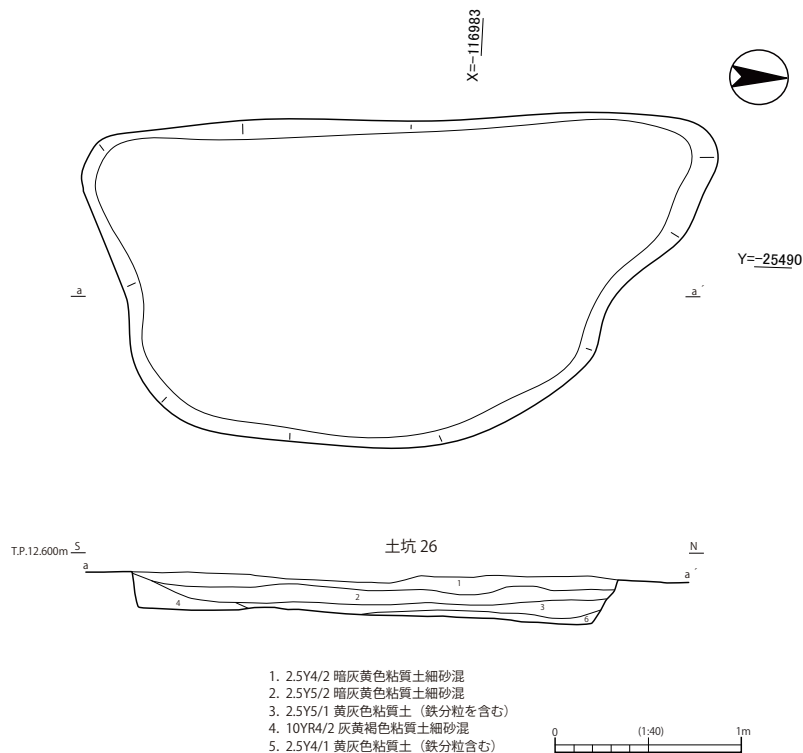


図 17 溝 8 土層断面図 (1 : 40)



1. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土細砂混
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土細砂混
3. 2.5Y5/1 黄灰色粘質土 (鉄分粒を含む)
4. 10YR4/2 灰黄褐色粘質土細砂混
5. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 (鉄分粒含む)

図 18 土坑 26 平面図、断面図 (1 : 40)



ているが、溝 13 の上部、溝 8 の西肩を切っている。途切れ途切れであるが、長さ 49.7m、幅 0.2 ～ 0.45、深さ 0.1 ～ 0.2m である。埋土は灰黄褐色粘質土が主体である。遺物は土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦器、瓦が出土している。瓦器は大部分が残って出土した。

溝 6 (図 19, 図版 1) 調査区東側で検出した南北に延びる溝である。溝 2、3、43 に切られている。溝 13 柱穴 46、47、54、58 の上部を切っている。北側は調査区外に延びる。途切れ途切れであるが検出面で長さ 48.8m、幅 0.1 ～ 0.3m、深さ 0.01 ～ 0.05m である。埋土は黄褐色粘質土で、鉄分粒を多く含んでいる。遺物は土師器、須恵器、瓦が出土している。

溝 7 (図 19, 図版 1) 調査区西側で検出した南北方向に延びる溝である。溝 1、2、3、42 に切られる。溝 13 上部を切っている。途切れ途切れであるが長さ 49.8m、幅 0.13 ～ 0.6m、深さ 0.03 ～ 0.6m である。埋土は黄褐色粘質土で、鉄分粒を多く含む。遺物は土師器、須恵器が出土している。

溝 12 (図 19, 図版 1) 調査区西側で検出した南北方向に延びる溝である。北側では溝 14 の東肩、溝 15 の西肩を、南側では溝 15 の東肩上部、溝 20 の上部を切っている。南北共に調査区外へ延びる。途切れ途切れであるが長さ 49.9m、幅 0.15 ～ 0.55m、深さ 0.03 ～ 0.18m である。埋土は黄灰色粘質土である。遺物は須恵器が出土している。

溝 15 (図 19、21, 図版 1) 調査区西側で検出した南北方向に延びる溝である。北側では西肩を溝 12 に切られ、中央で溝 14 に切られる。南側は東肩上部を溝 15 に切られる。南北共に調査区外へ延びる。一部は調査区東側へ広がる。検出面で長さ 49.8m、幅 0.4 ～ 0.6m、深さ 0.2 ～ 0.3m である。埋土は灰黄褐色粘質土が主体である。遺物は土師器、須恵器、青磁、瓦器、瓦が出土している。

溝 1 (図 19、21, 図版 1) 調査区西側で検出した南北方向の溝である。北側は溝 7 の西肩、溝 19 の東肩を切っている。北側は調査区外へ延びる。検出面で長さ 32.9m、幅 0.25 ～ 0.35m、深さ 0.15 ～ 0.27m である。底面には木材が土化しながらも残っていた。埋土は灰黄色粘質土が主体である。遺物は土師器が出土している。

溝 2 (図 19, 図版 1) 調査区北側で検出した東西方向の溝である。溝 6、7、8、9、10 を切っている。西側は溝 1 に取り付き、東側は調査区外へ延びる。検出面で長さ 6.2m、幅 0.38 ～ 0.4m、深さ 0.2 ～ 0.26m である。底面には木材が土化しながらも残っていた。埋土は黄灰色粘質土が主体である。遺物は出土していない。

溝 3 (図 19, 図版 1) 調査区中央で検出した東西方向の溝である。溝 6、7、8、17 を切っている。西側は溝 1 に取り付き、東側は調査区外へ延びる。検出面で長さ 6.8m、幅 0.38 ～ 0.44m、深さ 0.23 ～ 0.26m である。底面には木材が土化しながらも残っていた。埋土は黄灰色粘質土である。遺物は出土していない。

溝 42 (図 19, 図版 1) 調査区南側で検出した東西方向の溝である。溝 6、7、8、25、31、32、41 を切っている。西側は溝 1 に取り付く。検出面で長さ 6.8m、幅 0.27 ～ 0.34m、深さ 0.16 ～ 0.19m である。埋土は黄灰色粘質土が主体である。遺物は出土していない。

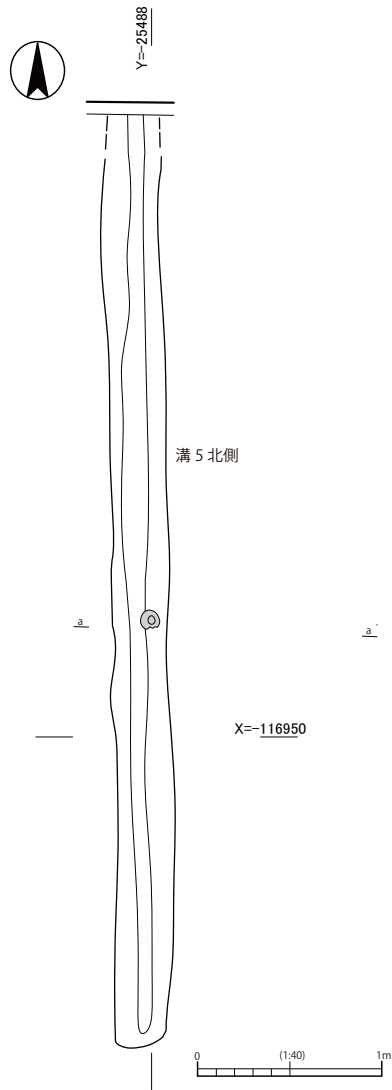


図 20 溝5 北側遺物出土状況平面図 (1:40)

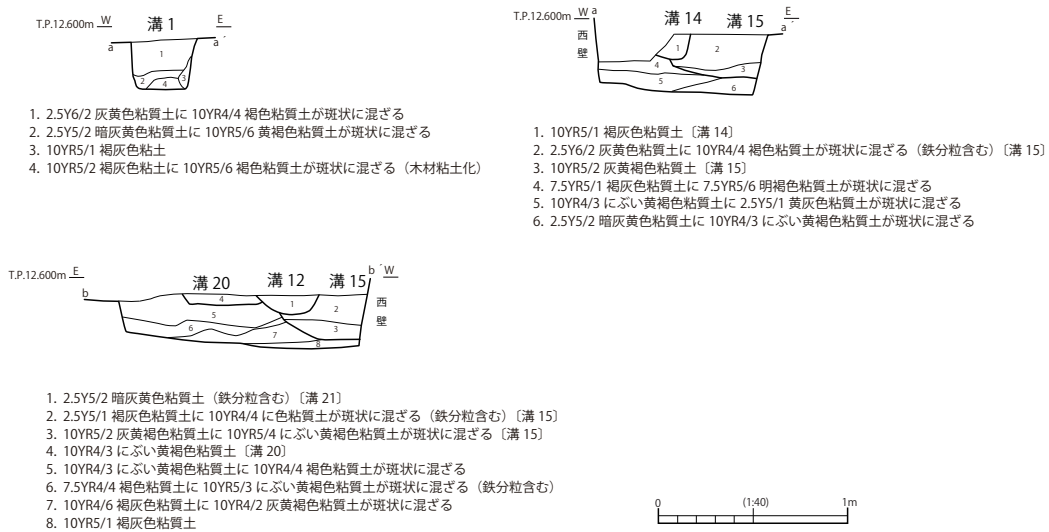


図 21 溝1、溝15 土層断面図 (1:40)

# 第4章 遺物

## 第1節 遺物の概要

今回出土した遺物はコンテナバットに3箱で、土師器、須恵器、緑釉陶器、輸入磁器、焼締陶器、瓦器、瓦質土器、石製品、瓦が出土している。遺物の時期は弥生時代、古墳時代、奈良時代、鎌倉時代から室町時代の遺物が出土している。

出土した遺物は細片が大多数であったが、中心となる時期は奈良時代である。流路がいくつもあるため、流れや氾濫などの影響か奈良時代以前の土師器は表面が剥離または摩滅しているものが多い。石製品は弥生時代の石鏃が出土している。

表2 出土遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
弥生時代	土師器、石製品		石製品2点		
古墳時代	須恵器		須恵器3点		
奈良時代	土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦		土師器11点、須恵器2点、瓦2点		
鎌倉時代から室町時代	土師器、須恵器、輸入磁器、焼締陶器、瓦器、瓦質土器		土師器2点、輸入磁器2点、瓦器1点		
合計		3箱	25点(1箱)		2箱

※コンテナ箱数の合計は、整理後Aランク遺物を抽出したため出土時より1箱多くなっている。

## 第2節 出土遺物

柱穴58出土土器(図22, 図版9)1は須恵器甕の頸部の破片である。器壁は厚く。外面には突帯が2条、青海波状文がみられる。

流路13出土土器(図22, 図版8、9)2は土師器椀である。体部は丸みを帯びて立ち上がり、口縁部端部は外反する。内外面とも表面は摩滅しているが、外面にはケズリの痕跡が残る。3～5は須恵器である。3は杯蓋である。天井部外面は回転ヘラケズリ、天井部は口縁部付近から天井部内面にかけて回転ナデが施されている。口縁部内面には段がつく。4は杯身である。底部外面は回転ヘラケズリ、底部外面の受部付近から底部内面にかけて回転ナデが施される。口縁部はやや内傾して立ち上がり、端部は僅かに凹んだ面を持つ。底部外面には×状のヘラ記号がみられる。5は杯身である。体部は下位で斜め方向に直線的に立ち上がり上位でやや外反する。口縁部は外反し、端部は上方に向かう。

東壁24層出土土器(図22, 図版8、9)6～9は土師器の杯、10土師器の皿である。6の体部はやや丸みを持って斜め方向に立ち上がる。口縁部は丸く収める。内外面ともに剥離により調整は不明であ

る。7の体部は斜め方向に直線的に立ち上がる。口縁端はやや外反し端部は上方に向かう。口縁部はナデ調整、体部内外面ともに剥離により調整は不明である。8の体部は斜め方向に直線的に立ち上がり、口縁部はナデ調整によって段が付く。口縁端部は丸く収める。体部内面外面は剥離しているが、外面の一部にケズリ調整が残る。9の体部は斜め方向に直線的に立ち上がる。口縁は外反し、端部内側は上方に向かう。内外面ともに剥離により調整は不明である。10の体部はやや丸みを帯びて斜め方向に立ち上がる。口縁端部は丸く収まるが、内側は上方に向かう。口縁部はナデ調整、体部内外面ともに剥離により調整は不明である。

溝8(図22, 図版9)11は須恵器の杯身である。体部はやや斜め方向に直線的に立ち上がる。口縁部はやや外反し、端部は丸い。体部から口縁部にかけて回転ナデ調整されている。

溝状遺構59出土土器(図22, 図版9)12～16は土師器である。12は椀である。体部下位は丸みを帯びて立ち上がり、体部上位から口縁部にかけて斜め方向に直線的に立ち上がる。口縁部内面はナデ調整、体部外面から口縁部外面はケズリ調整されている。13は杯身である。体部は丸みを帯びて立ち上がる。口縁端部は上方へ向かう。内外面ともに剥離により調整は不明である。14は杯蓋である。体部は丸みを帯びて下方へ向かい、口縁部は内傾する。口縁部内面はナデ調整されている。体部内外面ともに剥離により調整は不明である。15、16は高台付きの杯身である。15の体部は斜め方向に立ち上がる。高台はやや開き、断面は台形状である。16はの体部はやや斜め方向に立ち上がる。高台はやや開き、幅は狭い。15、16共に内外面とも剥離により調整は不明である。

溝5出土土器(図22, 図版8)17は瓦器の椀である。体部下位は斜め方向に立ち上がり、体部上位で屈曲して上方へ向かう。口縁部外面から体部内面にかけてヘラミガキが施されており、暗文もみられる。体部外面には指頭圧痕が残る。

溝15出土土器(図22, 図版8、9)18、19は土師器の皿である。18は体部上位は外反し、口縁部はやや上方に向かう。体部内面から体部上位外面にかけてナデ調整されている。19の体部は斜め方向に直線的に立ち上がる。体部上位と下位との境には強いナデにより段がつく。体部内面から体部上位外面にかけてナデ調整されている。20は青磁の皿である。底部外面には回転ヘラ切りの痕跡が残る。底部内面には櫛描文、ヘラ描文が施されている。底部内面部から体部にかけて施釉されている。同安窯系のものである。

重機掘削時出土土器(図22, 図版9)21は青磁の椀である。体部上位は斜め方向へ向かい、口縁部はやや外反する。体部外面には蓮弁文が施される。体部内面から外面にかけて施釉されている。龍泉窯系のものである。

東壁72層出土瓦(図22, 図版9)22は複弁蓮華文軒丸瓦である。周辺は幅狭く低い。蓮弁と周縁の間に圏線が2条巡り、その間に珠文が配される。全体的に摩滅しており、裏面の調整は不明である。

柱穴48出土瓦(図22, 図版9)23は丸瓦である。全体的に摩滅しているが、凸面には縄叩痕、凹面には布目痕が残る。柱穴48の抜取痕より出土。

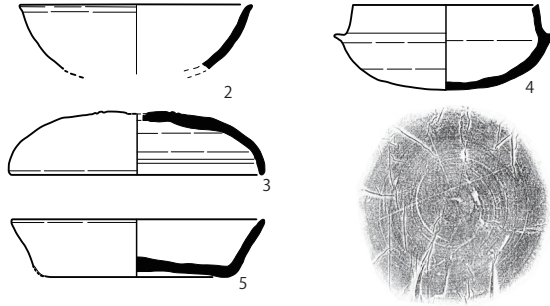
溝13出土石製品(図22, 図版9)24は石鏃である。サヌカイト製で、長さ5.5cm、幅1.8cm、厚さ0.7cmである。

柱穴48出土石製品(図22, 図版9)25は石鏃である。サヌカイト製で、長さ4.2cm、幅1.8cm、厚さ0.6cmである。

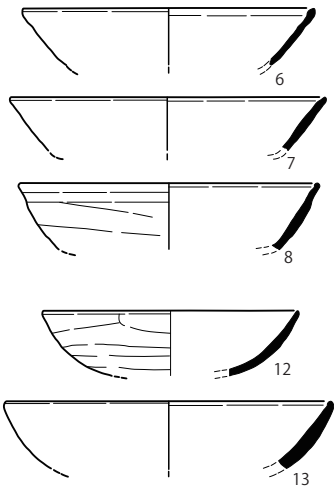




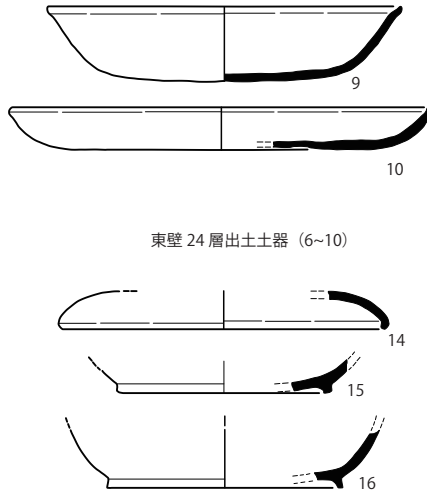
柱穴 53 出土土器 (1)



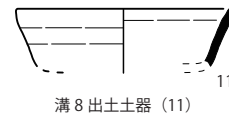
流路 13 出土土器 (2~5)



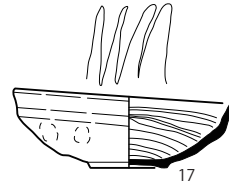
東壁 24 層出土土器 (6~10)



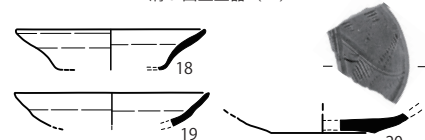
溝状遺構 59 出土土器 (12~16)



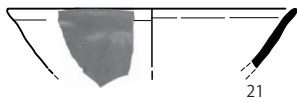
溝 8 出土土器 (11)



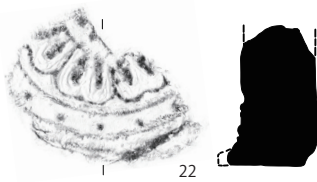
溝 5 出土土器 (17)



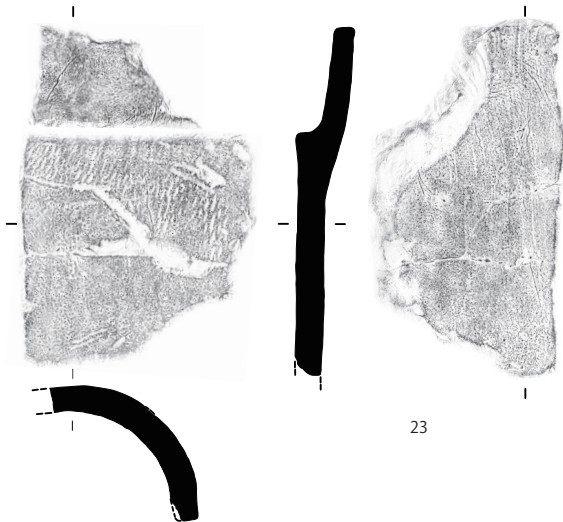
溝 15 出土土器 (18~20)



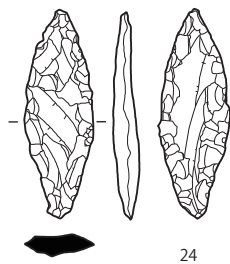
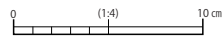
重機掘削時出土土器 (21)



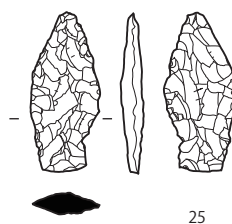
東壁 72 層出土土瓦 (22)



柱穴 48 出土土瓦 (23)



流路 13 出土石製品 (24)



柱穴 48 出土石製品 (25)

图 22 出土遺物 (土器、瓦 1:4) (石製品 1:2)

## 第5章 総括

今回、発掘調査を実施した京都市南区久世東土川町 366-1 は長岡京左京二条四坊一町に相当し、また東土川遺跡の想定範囲の中央付近に位置している。検出した遺構は、弥生時代の流路、古墳時代の柱穴、古墳時代から奈良時代の流路、長岡京期の溝、柱穴列、土坑、溝状遺構、鎌倉時代から江戸時代の柱穴、土坑、耕作に伴う溝がある。周辺では調査地南側で財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター<sup>(註6)</sup>によって実施された桂川パーキングエリアの発掘調査では長岡京期の大路、小路の側溝、建物跡、門跡、柵列、町内溝などが検出されている。また弥生時代の方形周溝墓、環濠、溝、流路、古墳時代の溝、流路、平安時代以降の建物跡や耕作に伴う溝などが検出されている。

また、表 1 に示した周辺の調査でも長岡京期の大路、小路の側溝、建物跡、柵列などが検出されている。そして、縄文時代の遺構も一部で検出されているが、大多数で弥生時代から近世までの遺構が検出されており、一帯では継続的に集落が形成されていたことが窺える。

当調査地で検出した遺構もそれらを構成する一部であることは確かであり、遺構から調査区内における弥生時代から近世までの変遷を考えることができた。以下、第 3 章で記したように弥生時代を 1.、それ以降を 2. として記す (図 24)。

1-1. この時期の遺構は弥生時代以降に形成された流路がある。検出した流路は概調査区北半を東西方向に流れるものであった。また、西側が高く、東側に向かって低くなっており、西から東へ向かって流れていたと推測できる。切り合い関係から流路 3 が検出できた流路内では先に形成され、その後、前後関係は明確にできないが流路 1、2、4 が形成されたと考えられる。調査区南半では平面形状は明確にできなかったが、東壁土層断面から流路 3、4 のような切り合い関係を持つ流路状の堆積が確認できた。そして、流路 1 から 3 下層でみられたシルトに近い灰色粘質土は流路 4 下層の河川堆積でみられるような砂礫層を切っておりその砂礫層は調査区南半へと続いていた。また、流路 1 北側の下層でも流路状の堆積が確認でき、調査区内にかなり大きな流路があった可能性はある。その流路が桂川の氾濫土や自然に埋没する過程で、幾筋もの流路が形成されていったと考えられる。

1-2. 古墳時代までに流路 1 から 4 が埋没した時期と考えられる。東壁 9 層北辺は古墳時代から奈良時代の遺物が出土した溝 13 に切られており、東壁 17 層はその下層にある。その層は流路 1、2、3 上層にある。流路 4 上層東壁 24 層は奈良時代の遺物を多く含む層であるが、その層に切られる南側の 35 層は遺物を含まない礫を含む締まった粘質土層であり、その下層で流路 4 の南肩が確認できる。また埋土は流路 1、2 と同質なものである。そのため、この時期に埋没したと判断した。

2-1. 古墳時代から奈良時代の柱穴、流路がある。古墳時代に遺構では柱穴 52～55 があり、平面形で東壁 9 層の中に島状にみられる締まった粘質土上で検出した。柱穴 52、53 では古墳時代の遺物に混ざり弥生時代の土師器も出土している。流路 13 で出土した土師器は細片が多く、摩滅や剥離により表面の調整が不明であったが、須恵器には摩滅などはみられなかった。土師器、須恵器をみると 6 世紀代から 8 世紀後半までのものが含まれていた。長い間流れていたかは定かではないが、長岡京期の溝 8 に切られているため、少なくとも長岡京造営前の段階では埋没していたと考えられる。遺構は調査区北側のみで検出である。調査区中央から南壁にかけては奈良時代の遺物を含む土層が平面形で流路状に確認できるため、繰り返し氾濫などの影響を受けていたものと考えられる。

2-2. 長岡京造宮から廃絶までの時期である。この時期の遺構では柱穴列、溝、土坑、溝状遺構がある。調査区は長岡京条坊復元で左京二条四坊一町北側の西辺に当たり東三坊大路の東側側溝の検出が想定できる位置にある。同調査地内で実施された試掘調査では1トレンチで南北の溝と東西の溝が取付く状況で検出されている(図23)。また南北溝は2、3トレンチへと続いていた。溝8は試掘調査で検出された南北溝を約50mある調査区を南北に貫く溝として検出したものである。

そして、溝8南側では西肩から東へ1.3～1.5mで柱穴列1を構成する柱穴46、47、48、58の西側に至る。検出できた柱穴は柱間2.3～2.5mで南北7.2m、3間で、軸は北側で西に僅か振れる。いずれも柱は抜取られており抜取られた方向は柱穴48は西側、他は南側であった。周辺の調査でみると(図25)大路、小路側溝や柱穴が検出されている場合、建物跡ならば側溝からは少なくとも2m以上離れて建てられている。2m以内になると柵列や門跡となっている。それを踏まえて考えると柱穴列1は柵列の可能性が高い。また、調査区北側で柱穴列1を構成するような柱穴や、その他柱穴を検出できなかったことから、町内を区画する直線の柵列の北側もしくは2分の1町を四角に囲う柵列の西北角部分の可能性もある。

溝8は条坊築地心の想定位置から内に入り、北で僅かに東に振れるが、左京二条四坊二町<sup>(註7)</sup>、左京三条三坊一町<sup>(註8)</sup>で検出された東三坊大路東側側溝の延長上に位置している。さらに延長上にある試掘調査1トレンチ南北溝は北側へ延びる。また、南北大小路と東西大小路が交差する所では側溝は交差もしくは取付く状況になるようで、試掘調査1トレンチの東西溝と南北溝の状況はそれを反映したものであろう。そして、柱穴列との関係も考えると溝8は築地内溝とみるよりは東三坊大路東側側溝(溝心X=-116971.5120,Y=-25487.9609)であると考えられる。

2-3-1. 長岡京廃絶後の時期である。平安京時代の遺構は検出できず、鎌倉時代から室町時代の溝が検出できた。いずれも耕作に伴うもので、鎌倉時代から室町時代のものは複数切り合うものと、切り合わず1条のものがあつた。途切れ途切れではあつたが調査区内を南北に貫いてた。2組ある複数切り合った溝で、それぞれ古いものと考えられる溝5からは14世紀代から15世紀代、溝15から13世紀後半から14世紀代とみられる<sup>(註9)</sup>土器が出土しており、少なくともそれ以降に複数回掘られたとみられる。これらは土地区画の役割も果たしており、複数回掘削されるのは土地区画の重要な基点であつた可能性があると考えられている<sup>(註10)</sup>。また、平安時代以来の条里型地割において、南側の左京二条四坊二町は九条村田里19、20、29、30坪に推定されている<sup>(註11)</sup>。その北側には十条室町里となっており、また乙訓郡では坪は南西角から渦巻き状に数えられていることを考えると<sup>(註12)</sup>、当調査地は十条室町里24坪に相当する可能性がある(図26)。

2-3-2. 江戸時代の溝が検出できた。溝1～3、溝42は底面に木材が敷かれていたようで、土化しながらも痕跡が確認できた。耕作地に水を引くための暗渠と考えられ、溝2、3、42の間隔は一定していない。

今回、東土川遺跡の集落に関連する遺構は確認できなかったが、長岡京に関連する溝、柱穴列は確認できた。溝は東三坊大路の東側側溝、柱穴列は柵列の一部であると考えられる。南側の左京二条四坊二町、左京三条四坊一町で検出された東三坊大路の東側側溝の位置よりは条坊復元による築地心よりもやや東に入り込んでいるため、左京二条四坊一町北側の西辺は若干幅が狭かつたとみられる。

その後、鎌倉時代から室町時代にはすでに耕地化し、江戸時代を通じてそのまま耕地として利用されていたことが確認できた。

<参考文献>

(註6) (註1)に同じ

(註7) (註1)に同じ

(註8) 財団法人京都市埋蔵文化財研究所『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』1988年

(註9) (註5)に同じ

(注10) 伊野近富「中世土器の編年(下)」『京都府埋蔵文化財情報 第60号』財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1996年

(註11) (註1)に同じ

(註12) 長岡京市史誌編纂委員会編『長岡京市史 本文編一』長岡京市役所 1996年

長岡京市史誌編纂委員会編『長岡京市史 資料編二』長岡京市役所 1992年

京都市『資料 京都の歴史 第13巻 南区』平凡社 1992年

向日市史誌編纂委員会編『向日市史 上巻』京都府向日市 1983年



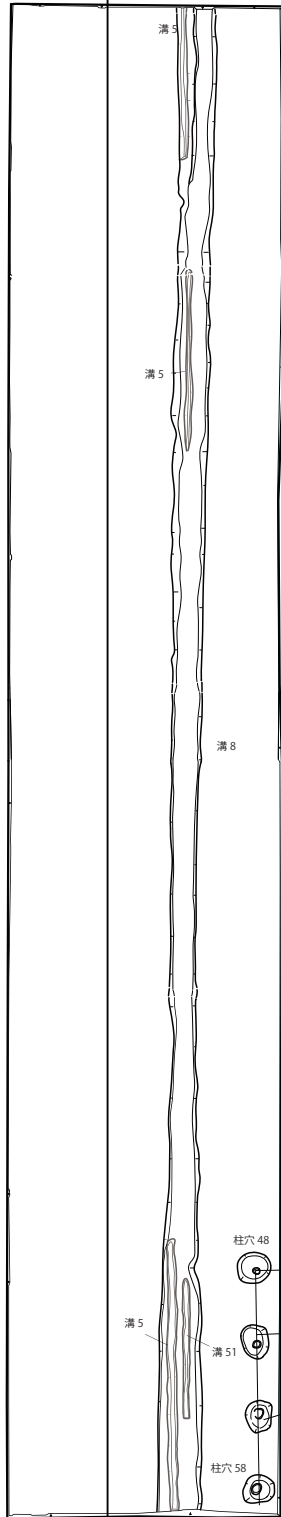
Y=-25500

Y=-25490

Y=-25480

想定条坊築地心

左京二条四坊一町



X=-116950

X=-116960

X=-116970

X=-116980

X=-116990

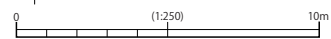


図 23 調査区と試掘トレンチ 1 (1 : 250)

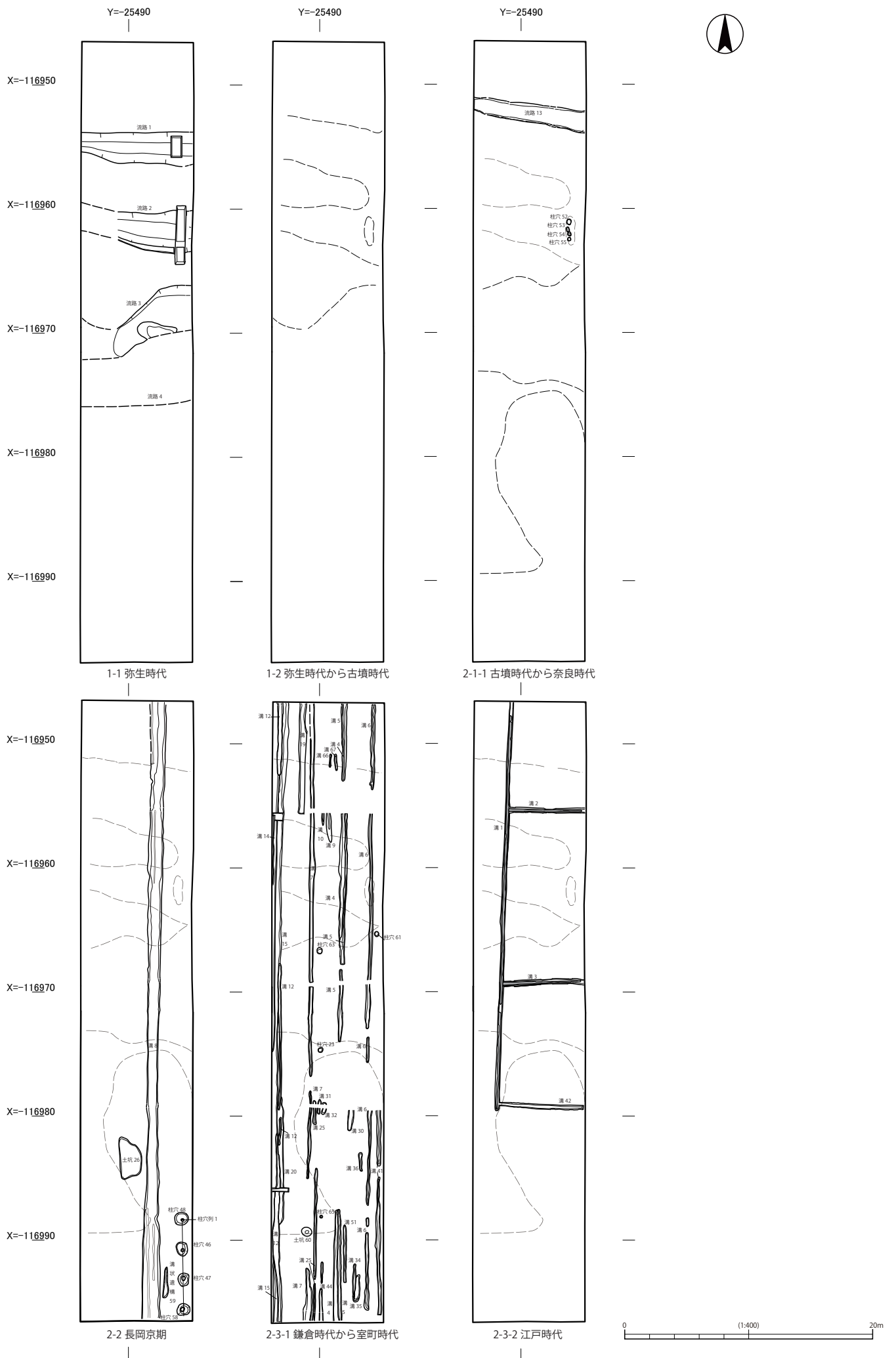


図 24 調査区遺構変遷図 (1 : 400)

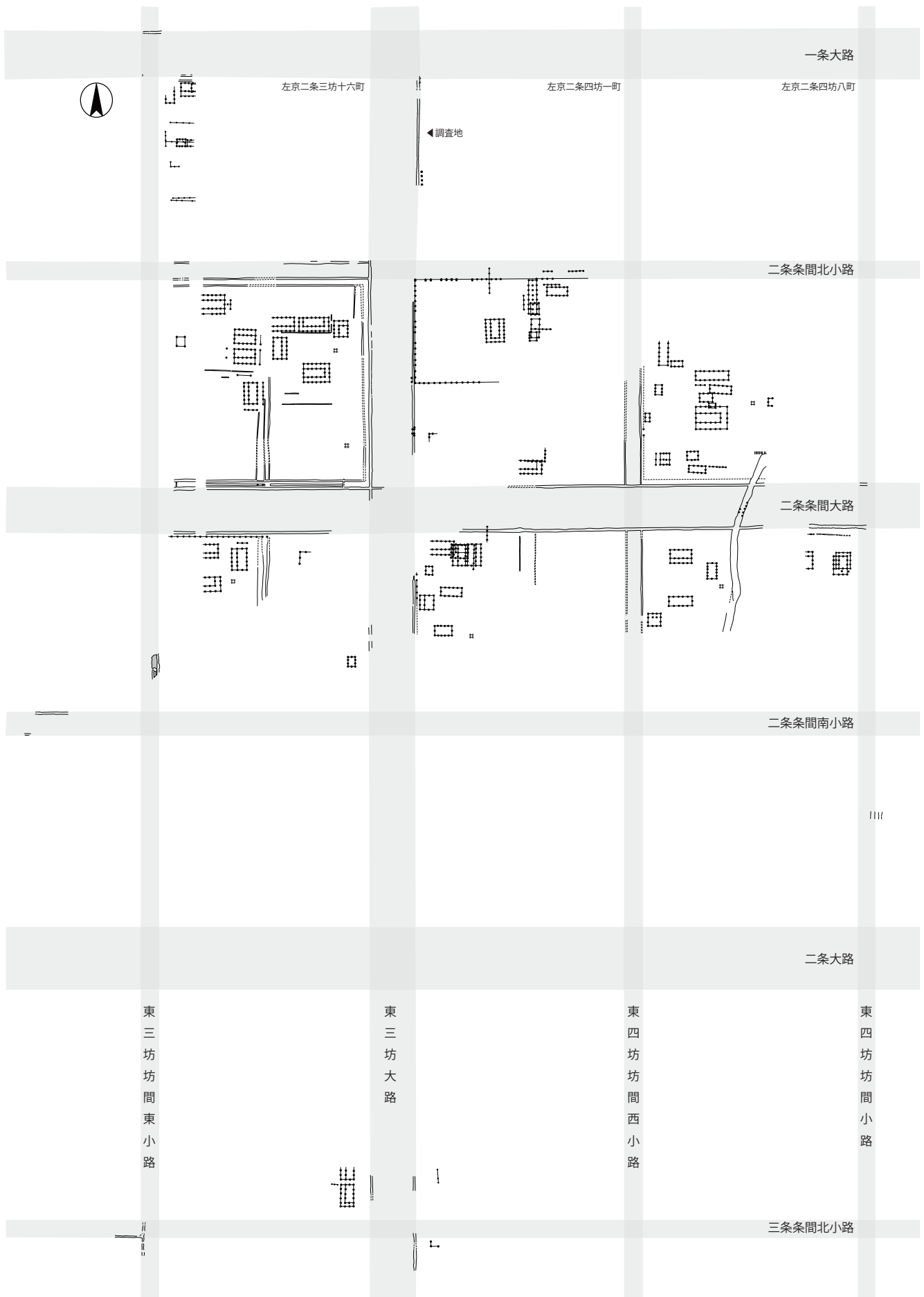


図 25 調査地と既往調査地の長岡京期主要遺構配置図 (1 : 3000)

※表 1 内 10、12、13、15、16、18、19、20 を参照

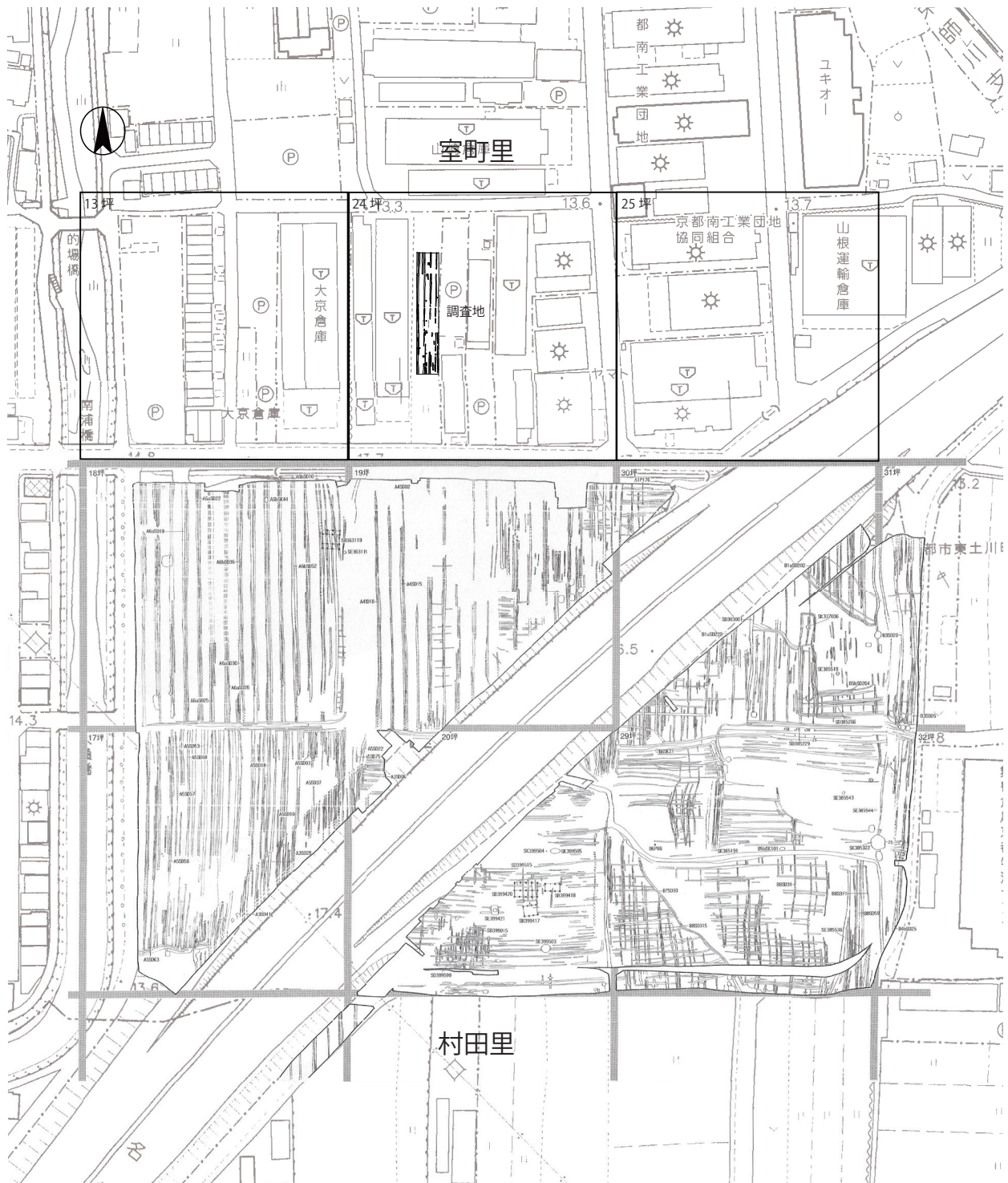


図 26 条里型地割概念図 (1 : 2500)

註 1 を基に、註 12 を参照して調査地も坪を想定



表3 遺物観察表

※法量のカッコ内は土器の口径・底径は復元、器高は残存、瓦はいずれも残存

報告書 No.	出土遺構	器種	器形	口径	器高	底径	形成技法の特徴	色調	胎土	備考
図 22-1	柱穴 51	須恵器	甕	—	(2.5)	—	内面は回転ナデ 外面には青海波状文	内面：N6/ 灰色 外面：10Y4/1 灰色	良	6 世紀代
図 22-2	溝 13	土師器	椀	(12.2)	(3.4)	—	内面は摩滅している 外面は摩滅しているが、砂粒の動きがあるためケズリか	内外：75YR6/6 橙色	良	8 世紀代
図 22-3	溝 13	須恵器	杯蓋	(13.0)	3.2	—	内面は回転ナデ 外面は天井部は回転ヘラケズリ、「×」状のヘラ記号、口縁部は回転ナデ	内面：N6/ 灰色 外面：10Y5/1	良	6 世紀代
図 22-4	溝 13	須恵器	杯身	9.8	4.5	9.0	内面は回転ナデ 外面は底部は回転ヘラケズリ、受部から口縁部は回転ナデ	内外面：N6/ 灰色	良	6 世紀代
図 22-5	溝 13	須恵器	杯身	13.2	3.1	9.4	内面は回転ナデ 外面は回転ナデ、底部は回転ヘラ切り	内外面：N6/ 灰色	良	8 世紀代
図 22-6	東壁 24 層	土師器	杯身	(15.4)	(3.0)	—	内面は剥離している 外面は剥離している	内外面：10YR8/4 浅黄橙色	良	8 世紀代
図 22-7	東壁 24 層	土師器	杯身	(16.6)	(2.8)	—	内面は剥離している 外面は口縁部ナデ、体部は剥離している	内外面：5YR7/6 橙色	良	8 世紀代
図 22-8	東壁 24 層	土師器	杯身	(15.6)	(3.5)	—	内面は剥離している 外面は口縁部はナデ、体部は剥離しているが、一部にヘラケズリ残る	内面：7.5YR7/4 にぶい橙色 外面：10YR8/3 浅黄橙色	良	8 世紀代
図 22-9	東壁 24 層	土師器	杯身	(18.6)	4.0	(13.0)	内面は剥離している 外面は剥離している、底部に煤付着	内外面：5YR7/6 橙色	良	8 世紀代
図 22-10	東壁 24 層	土師器	皿	(22.0)	(2.2)	(17.4)	内面は口縁部はナデ、体部から底部は剥離している 外面は口縁部はナデ、体部から底部は剥離している	内外面：5YR7/6 橙色	良	8 世紀代
図 22-11	溝 8	須恵器	杯身	(11.2)	(3.2)	—	内面は回転ナデ 外面は回転ナデ	内外面：N6/ 灰色	良	8 世紀代
図 22-12	溝状遺構 59	土師器	椀	(13.4)	(3.4)	—	内面は剥離している 外面はヘラケズリ	内外面：5YR7/4 にぶい橙色	良	8 世紀代
図 22-13	溝状遺構 59	土師器	杯身	(17.2)	(3.5)	—	内面は剥離している 外面は剥離している	内外面：7.5YR7/4 にぶい橙色	良	8 世紀代
図 22-14	溝状遺構 59	土師器	杯蓋	(17.0)	(2.0)	—	内面は口縁部はナデ、天井部は剥離している 外面は剥離している	内外面：5YR7/6 橙色	良	8 世紀代
図 22-15	溝状遺構 59	土師器	高台付 杯身	—	(2.7)	(11.3)	内面は剥離している 外面は剥離している	内外面：10YR8/2 灰白色	良	8 世紀代
図 22-16	溝状遺構 59	土師器	高台付 杯身	—	(3.1)	(12.5)	内面は剥離している 外面は剥離している	内外面：5Y8/1 灰白	良	8 世紀代
図 22-17	溝 5	瓦器	椀	11.4	2.4～ 4.1	4	内面はヘラミガキ 外面は口縁部はヘラミガキ、体部には指頭圧痕が残る。	内外面：7.5Y2/1 黒色	良	13 世紀後半～ 14 世紀
図 22-18	溝 15	土師器	皿	(10.0)	(2.1)	—	内面はヨコナデ 外面はヨコナデ	内面：7.5YR8/6 浅黄橙色 外面：10YR7/2 にぶい黄橙色	良	14 世紀後半～ 15 世紀
図 22-19	溝 15	土師器	皿	(10.2)	(1.7)	—	内面はヨコナデ 外面は口縁部はヨコナデ	内外：5Y8/1 灰白色	良	14 世紀代
図 22-20	溝 15	青磁	皿	—	(1.0)	5.2	内面はヘラ描き文、クシ描き文、 外面は体部はヘラケズリ、底部はヘラ切り、残存部は無釉	釉：7.5Y6/2 灰オリーブ色 素地：5Y7/1 灰白色	良	同安窰系 12 世紀後半
図 22-21	重機掘削	青磁	椀	(14.8)	(3.1)	—	内面は施釉 外面は施釉、体部に蓮弁文	釉：5GY7/1 明オリーブ色 素地：N8/ 灰白	良	龍泉窰系 13 世紀代
図 22-22	東壁 72 層	瓦	軒丸瓦	—	—	—	複弁蓮華文	内外：N2/ 黒色	良	8 世紀代
図 22-23	柱穴 48	瓦	丸瓦	長さ (18.3)	高さ (7.0)	幅 (7.8)	凸面には縄目印 凹面には布目痕	内外：10Y4/1 灰色	良	8 世紀代
図 22-24	溝 13	石製品	石鑑	長さ 5.5	幅 1.8	厚さ 0.7				弥生時代
図 22-25	柱穴 48	石製品	石鑑	長さ 4.2	幅 1.8	厚さ 0.6				弥生時代



# 図 版





1 調査前全景（南から）



2 中、近世遺構全景（南から）



1 溝8全景（南から）



2 溝8全景（北から）



1 調査区遺構全景（南から）



2 調査区遺構全景（北から）



1 柱穴列1検出状況(南から)



2 柱穴列1完掘状況(南から)





1 溝5 遺物出土状況 (南から)



2 溝13 遺物出土状況 (西から)



1 流路1全景（北西から）



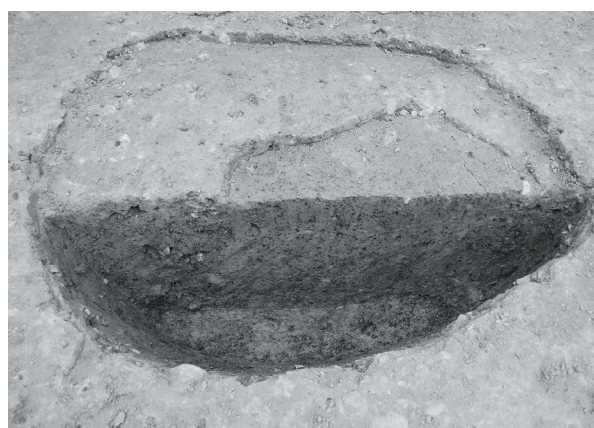
2 流路2全景（南から）



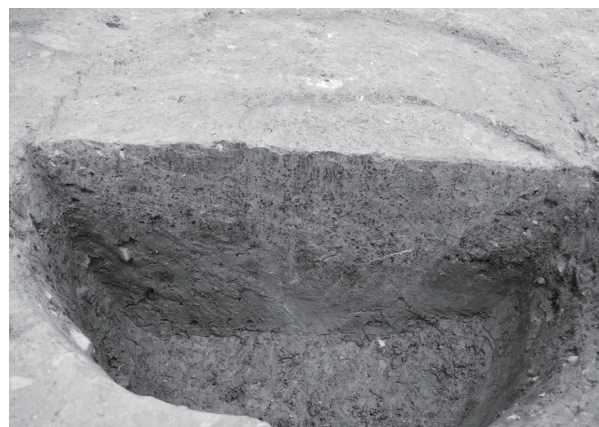
1 流路 3、4 全景 (南から)



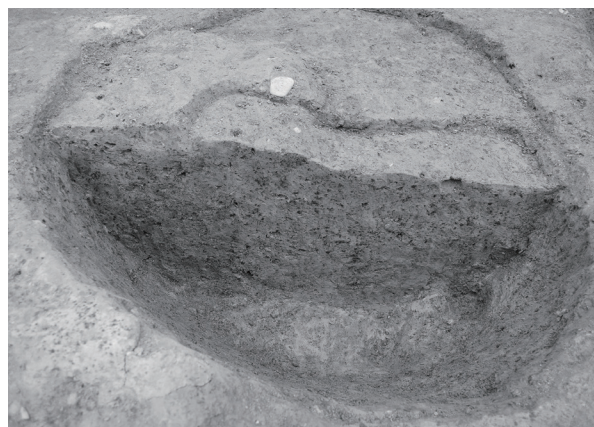
2 柱穴 46 土層断面 (西から)



3 柱穴 47 土層断面 (西から)



4 柱穴 48 土層断面 (北から)



5 柱穴 58 土層断面 (西から)



流路 13 圖 22-3



流路 13 圖 22-5



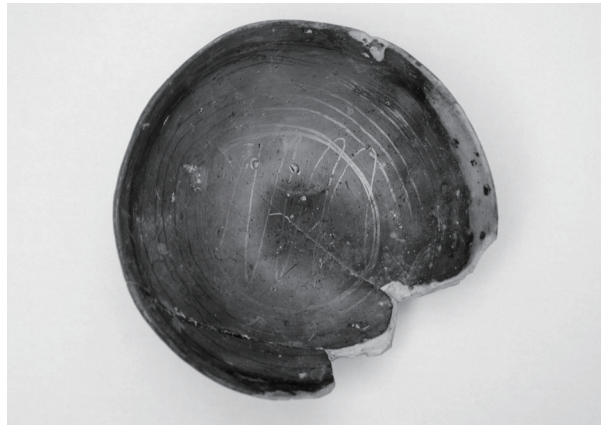
流路 13 圖 22-4



溝 5 圖 22-17



流路 13 圖 22-4 底部



溝 5 圖 22-17 底部



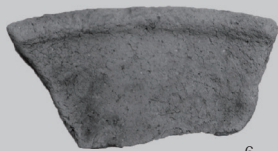
東壁 24 層 圖 22-9



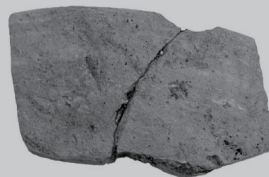
東壁 24 層 圖 22-10



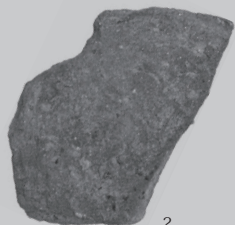
1  
柱穴 53 図 22-1



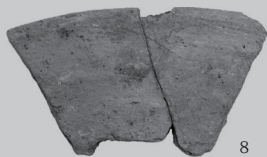
6



7

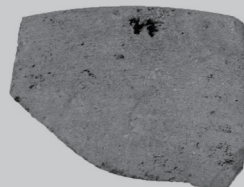


2  
流路 13 図 22-2



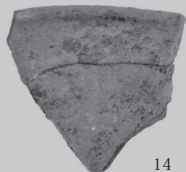
8

東壁 24 層 図 22-6、7、8



11

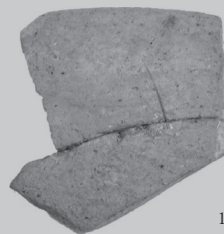
溝 8 図 22-11



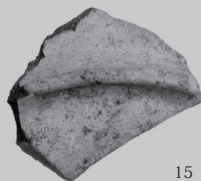
14



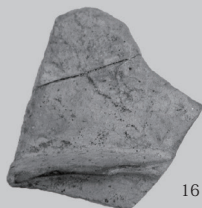
12



13

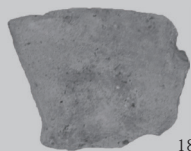


15

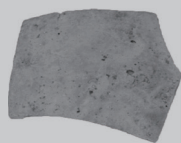


16

溝状遺構 59 図 22-12 ~ 16

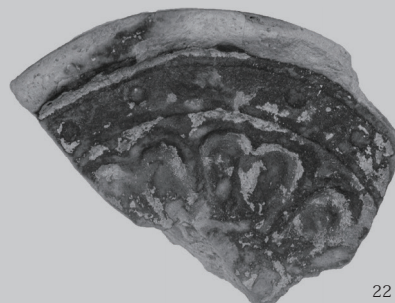


18



19

溝 15 図 22-18、19



22

東壁 72 層 図 22-22



23 凹面

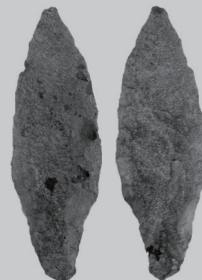


23 凸面

柱穴 48 図 22-23、25



25



24

溝 13 図 22-24



# 報告書抄録

ふりがな	ながおかきょうさきょうにじょうよんぼういっちょうあと・ひがしつちかわいせきまいぞうぶんかざいはくつちょうさほうこくしよ
書名	長岡京左京二条四坊一町跡・東土川遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書
副書名	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	河野凡洋
編集機関	国際文化財株式会社
所在地	〒660-0805 兵庫県尼崎市西長洲町1丁目1番15号
発行機関	国際文化財株式会社
所在地	〒660-0805 兵庫県尼崎市西長洲町1丁目1番15号
発行年月日	西暦2018(平成30)年8月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 °'〃	東経 °'〃	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ながおかきょうさきょう 長岡京左京 にじょうよんぼう 二条四坊 いっちょうあと 一町跡・ ひがしつちかわいせき 東土川遺跡	きょうとし 京都市 みなみくくぜ 南区久世 ひがしつちかわまち 東土川町 366-1	26107	3・ 783	34° 56' 43"	135° 43' 13"	2018年 4月11日～ 2018年 5月31日	450.0	株式会社 辻製作所工場 新築工事に伴 う。

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長岡京左京二 条四坊一町跡・ 東土川遺跡	都城・ 集落遺跡	弥生時代～奈良時 代、鎌倉時代～ 江戸時代	流路、柱穴、溝、 土坑	土師器、須恵器、 緑釉陶器、磁器、 瓦器、瓦質土器、 瓦、石製品、等	
要約	主に長岡京左京二条四坊一町跡内の柱穴列、溝を検出した。溝は東三坊大路の東側側溝、柱穴列は町内を区画する柵列の一部と考えられる。長岡京期以前は弥生時代の流路、古墳時代の柱穴、古墳時代から奈良時代の遺物が出土した流路がある。また長岡京廃絶後の平安時代の遺構は検出できず、鎌倉時代以降の耕作に伴う溝を検出した。				

長岡京左京二条四坊一町跡・  
東土川遺跡  
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日 / 2018 (平成 30) 年 8 月 31 日

編集・発行 / 国際文化財株式会社

〒 660-0805 尼崎市西長洲町 1 丁目 1 番 15 号

TEL : 06-4868-5980 FAX : 06-4868-5981

印刷 / 三星商事印刷株式会社

〒 604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地

TEL : 075-256-0961